間　山

――間山遺跡緊急発掘調査報告書――

1984.3

中野市教育委員会

間　　山

――間山遺跡緊急発掘調査報告書――

1984.3

中野市教育委員会

序

間山遺跡は、十二川と裾無川によって作り出された日野扇状地にあり、縄文時代から中世にかけての大複合遺跡であります。

このたび、この遺跡の範囲において、県道高井中野線の拡巾改良工事が計画されたため関係者により現地協議を行なった結果、施工前に記録保存のための緊急発掘調査を行う事になり、事業主体である中野建設事務所の御理解を得て、委託契約により、中野市教育委員会が実施したものであります。

調査は、日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会会長の金井汲次先生を団長に、調査主任檀原長則・調査員田川幸生・小林軍司・池田実男の各氏にお願いするとともに、地域の多数の皆様方の御協力を得て実施しました。

今回の調査によって住居址4軒をはじめ縄文から歴史時代に及ぶ多くの資料を発掘し、間山地区をはじめ地域の先史及び歴史時代の生活や文化を解明するうえに極めて貴重な資料を得ることができました。

残暑のなか長期にわたる調査になりましたが、間山区をはじめ調査に御協力くださった多くの方々に心から感謝を申し上げるとともに、このような立派な報告書作成のためにご苦労いただいた調査団の先生方に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年3月

中野市教育委員会

教育長　嶋　田　春　三

目　　次

序
第１章　はじめに…… 1
　第１節　発掘までの経過…… 1
　第２節　調査団の構成…… 2
　第３節　調査の経過…… 3
第２章　遺跡の立地と環境…… 7
第３章　歴史的背景…… 10
第４章　発掘調査の記録…… 13
　1　Ａ地区…… 13
　2　Ｂ地区…… 16
　3　Ｃ地区…… 16
　4　Ｄ地区…… 24
　5　Ｅ地区…… 35
　6　Ｆ地区…… 54
第５章　むすび…… 58

表　目　次

第１表　周辺の遺跡分布表…… 7
第２表　Ｃ地区出土土器…… 59
第３表　Ｄ地区出土土器…… 60
第４表　Ｅ－３・４地区出土遺物…… 61
第５表　Ｅ地区集石墓状土壙出土土器…… 62
第６表　Ｅ地区弥生住居址出土土器…… 63
第７表　Ｅ地区土師住居址出土土器…… 63
第８表　間山遺跡編年表……

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図…… 9
第２図　調査地区設定図…… 12
第３図　Ａ地区グリッド設定図…… 13
第４図　Ａ地区出土遺物…… 15
第５図　Ｂ地区グリッド設定図…… 16
第６図　Ｃ地区グリッド設定図…… 17
第７図　Ｃ地区拡張部グリッド設定図…… 17
第８図　Ｃ地区住居址実測図…… 18
第９図　Ｃ地区住居址柱穴及び土壙掘り下げ完了図…… 19
第10図　Ｃ地区拡張部実測図…… 20
第11図　Ｃ地区出土遺物実測図…… 22
第12図　Ｃ地区出土遺物実測図…… 23
第13図　Ｄ地区グリッド設定図…… 24
第14図　Ｄ地区弥生住居址実測図…… 25
第15図　Ｄ地区集石址実測図…… 26
第16図　Ｄ地区出土縄文時代遺物実測図…… 27
第17図　Ｄ地区出土遺物実測図…… 30
第18図　Ｅ地区グリッド設定図…… 35
第19図　Ｅ－３～４グリッド下層遺物分布実測図…… 38
第20図　Ｅ地区集石墓状土壙土器集中地点実測図…… 38
第21図　Ｅ地区集石墓状土壙上層掘り下げ実測図…… 39
第22図　Ｅ地区集石墓状掘り下げ完了実測図…… 39
第23図　Ｅ地区弥生住居址位置関係平面図…… 39
第24図　Ｅ地区弥生住居址実測図…… 42
第25図　Ｅ地区土師住居址実測図…… 44
第26図　Ｅ地区土師住居址カマド附近平面実測図…… 46
第27図　Ｅ－３～４グリッド出土遺物実測図…… 48
第28図　Ｅ地区集石墓状土壙出土遺物実測図…… 49
第29図　Ｅ地区集石墓状土壙出土遺物実測図…… 50
第30図　(上)Ｅ地区集石墓状土壙出土遺物実測図…… 51
(下)その他参考遺物実測図…… 51
第31図　Ｅ地区弥生住居址出土遺物実測図…… 52
第32図　Ｅ地区土師住居址出土遺物実測図…… 53
第33図　Ｆ地区グリッド設定及び遺物分布実測図…… 56
第34図　Ｆ地区遺物分布実測図…… 55
第35図　Ｆ地区出土遺物実測図…… 56

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまでの経過

今回実施した間山遺跡緊急発掘調査は、県道拡巾改良工事に伴う記録保存のための調査で、事業主体である中野建設事務所長と中野市長との委託契約に基づき中野市教育委員会が発掘調査を行ったものである。

（県道高井中野線は近時の車交通量の増大に伴い道路拡巾改良工事が鋭意順次進められているが、57年度からは間山北籍においても年度計画をもって工事が始められた。）

周知の埋蔵文化財包蔵地である間山遺跡は、縄文前期から弥生、土師、須恵、陶磁器までの長い年代にわたっての遺物が出土しており、且つ当市では濃厚な広範囲にわたる遺跡のひとつである。

この遺跡の範囲に接する形で、工事をされる県道高井中野線がはしっているが、57年度の工事現場からは数十点の弥生、土師器片が採集された。

このため遺跡の範囲を拡大するとともに、58年度以後の事業地域について中野建設事務所長からの埋蔵文化財保護に係る協議に基づき58年６月２日県教育委員会、事業主体の中野建設事務所、市教育委員会の各担当者と、地元学識者の金井汲次氏を交えて現地協議がなされた。その結果80点程の土器片を表採するなど現地の状況から遺跡存在が認められるので発掘調査をして記録保存をはかることになった。

８月２日付をもって中野建設事務所長と中野市長の間で間山遺跡発掘調査の委託契約が締結され、発掘面積は全体面積1,389㎡のうち300㎡以上とし、又道路工事との関係で現地作業は９月16日までに終了することになった。

８月10日調査団を編成するとともに、地元間山区長に発掘作業の協力を要請した。

（小野沢　捷）

第２節　調査団の構成

調査責任者　嶋田春三　中野市教育委員会　教育長

調査団長　金井汲次　日本考古学協会員　文化財保護審議会会長

調査主任　檀原長則　日本考古学協会員

調査員　田川幸生　〃　〃

〃　小林軍司　市文化財保護協力員

〃　池田実男　〃　〃

事務局　土屋練太郎　市社会教育課　課長

小野沢　捷　〃　歴史民俗資料館管理係長　長野県考古学会員

徳竹雅之　〃　主事　長野県考古学会員

（協力団体）　間山区　間山史談会

（参加者）　古田　茂　阿藤英奈　田川照生　山上嘉一　酒井健次　佐藤　慧　古川光夫　中山袈市　海野福松　海野昭二　羽片正人　鈴木嘉エ門　矢野修自　矢野忠良　和田俊子　小林市兵衛　田中まさみ　尾坂恵美子　藤岡とし子

以上本調査のために炎暑且つ多忙のなか鋭意御参加いただいた各位と重機に格別の配慮をいただいた(株)宮本に対し記して感謝を申し上げる次第である。

（小野沢　捷）

第３節　調査の経過

８月18日（木）曇のち雨

午後一部発掘資材を搬入する。調査員による現地打ち合せを行い、ＡからＦまでの地区を設定し、そのほか調査方法等を具体的に決めた。

８月19日（金）曇

発掘資材を搬入して、調査団、作業員、中野建設事務所、地元間山区、市教育委員会出席のもとに調査団結団式と安全祈願祭を行ったのち、（調査団本部のテントを設営して）調査に入った。道路は間山入口の北北西から南南東に向って（約5°の傾斜をもって）登っており調査地区設定は道路に沿って（下方から上方に向い）右側にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｆ、左側にＤ、Ｅとした。発掘地はいずれもアスパラが栽培されており、まず、Ａ、Ｂ地区の除草をした後2ｍ×2ｍのグリッドをＡは６グリッド、Ｂは30グリッドを設定した。Ａ地区から発掘を開始し古銭（聖宗元宝）１枚と、土師器片等の遺物少量が出土した。Ｂ地区については４グリッド着手したが遺物、遺構とも検出せず、耕作の折に拾い出された畦畔の石積の中から、土師器片多数を採集した。

８月20日（土）雨のち晴

Ａ地区を掘り下げたが遺物なし、朝から天候が不安定で昼近くになって雨が激しくなったため午前中で作業を中止した。

８月23日（火）晴時々曇

引続きＡ、Ｂ地区の掘り下げを行う。Ａ地区は以前土層が攪乱された形跡があった。Ｂ地区からは弥生、土師器片数点の出土のみ、写真撮影、実測をして遺物取り上げる。

８月24日（水）曇

Ａ－１より砥石２個と内耳土器片が出土、ＢＡ－10およびＢＡ－12から落ち込みを検出したが遺構として確認はできなかった。Ａ地区Ｂ地区（本部テント地を除く）の発掘を完了し写真撮影と実測を行う。

８月25日（木）小雨時々晴

Ｃ地区に入りアスパラ刈をしてグリットを設定する。小雨模様をついて作業続ける。しかし午後３時30分を過ぎた頃から雨激しくなり、しばらく休んだが晴れないため作業を中止する。遺物包含層が深いため表土層除去のみ、バックホーを使用することに決定し、手

配した。

8月26日（金）晴

遺構に確認されたＣＡ－６の周辺の表土除去を行った後掘り下げる。手づくね土器、刀子等が出土し、住居址と推定される落ち込みを確認する。Ｄ地区除草後バックホーにより表土除去を行う。２ヵ所から弥生土器片が出土した。

8月27日（土）晴

Ｃ地区の住居址を掘り下げ精査、平行して実測を行なう。Ｄ地区の掘り下げを開始する。縄文、弥生、土師等の多量の土器片が出土した。バックホールによりＥ地区の表土除去を行う。

8月29日（月）晴

Ｃ地区写真撮影、実測の後遺物取り上げる。引き続きＤ地区掘り下げをし遺物、遺構の検出につとめる。

8月30日（火）晴

Ｃ地区の掘り下げを続ける。黒耀石製石鏃１点および少量の土器片が出土した。Ｄ地区も礫がおびただしく作業能率が上らない。本部のテントをＤとＥ地区の間に移動する。

8月31日（水）晴

Ｃ地区カマド遺構の精査とかまど址横のピット掘り下げを行う。Ｄ地区のうち８グリッドの清掃を行い写真撮影、実測を行う。Ｅ地区も掘り下げに着手しＥ－５から黒耀石製石鏃１点が出土した。

9月1日（木）曇

テントを移動した後のＢ地区６グリッドについて掘り下げを開始、遺物遺構とも検出されなかったＤ地区のグリッドを24まで拡大して掘り下げる。Ｄ地区は３～４、11～16の場所が遺物の濃厚な地点であったが遺構は確認されなかった。Ｅ地区のうち５グリッドを掘り下げる。

9月2日（金）曇のち晴

引き続きＤ地区、Ｅ地区の精査を行なう。Ｅ地区からは弥生片がかなり出る。

9月3日（土）晴

Ｄ地区より甑片、頁岩製石鏃1点等が出土する。E—14～16間に集石址とそれに伴う土器群が検出され作業に力が入る。Ｃ地区は住居址内の包含層が数層に重なっているため作業が長引いている。土壙二基を掘り下げたが遺物なし。

9月4日（日）晴

日曜日ではあるが作業段取り上半日出て、D、E地区の実測を行う。

9月5日（月）晴

B地区測量完了。D・E地区引き続き掘り下げを行ない、E－3～4から打石斧出土、E－3～4、E－14～16について写真撮影と実測を進める。

9月6日（火）晴

D－24から住居址の壁と思われる落ち込みを確認する。E－14～16を精査、弥生時代の集石墓址2カ所と考えられる。写真撮影と実測を行う。

9月7日（水）曇一時雨

E地区の掘り下げと実測続ける。又C地区の延長にもグリッドを設定バックホーで表土除去を行なう。雨のため午前中で作業を中止する。

9月9日　（金）晴

F地区に2グリッドを設定、D－17～24、E－14～16の実測続ける。C23～24からは須恵器、陶器片のほか多量の土師器片が出土したが、遺構は検出されない。

9月10日（土）晴

F地区からは少量の土器片出土のみである。C－23～24は遺物の成果があったが遺構確認できず、写真撮影実測後遺物を取り上げて完了する。D－24の住居址壁は道路の下に入ってしまいプランの確認にまでは至らなかった。

9月11日（日）曇時々雨

F地区を引続き精査したが小形の磨製石斧1点と弥生を主とし縄文、土師器片200余点の出土で遺構は検出しなかった。D、E地区の実測継続して行なう。

9月12日　（月）雨後晴

いよいよ日程がつまって来たため、雨模様であるが、E地区で作業を進める。D－18～19は実測完了。E－14～16は実測完了したので想定の集石墓Aは断面掘と同Bは全面掘を始めたが10cm程の下層から再び弥生土器群が出土する。E－10～11からは土師（国分終末期）の坏が8点完形で出土し、住居址南東部にカマドを据えた住居址をほぼ完全な形で検出した。

9月13日（火）曇

E－10～11の土師住居址清掃、写真撮影、実測を行う。住居址の一部が道路下に入るが、4.6×6m位の隅丸方形と推定できる。石組カマドもしっかりしており、カマド右には1m

×66cmの大石が置かれていた。E－14～16を更に掘り下げると住居址と思われる壁が出土し床面も一部確認する。

9月14日（水）曇

E－14～16で住居址検出する。南西部側が一部道路の下になっているのが残念であるが、4m×5m程の隅丸方形プランの弥生後期の住居址である。実測を平行して進める。

9月15日（木）曇

E－14～16を精査、弥生住居址は、北側の傾斜下面では壁面が消滅している。ほぼ中央の柱穴2個の間に炉址がある。床面には遺物僅少である。B地区までの埋戻し完了する。

9月16日（金）晴

E－14～16の清掃、実測、写真撮影を午後4時に終了、埋戻しを午後6時までかかって現地作業を終えた。

9月17日（土）

事務局により調査団本部の撤収を行なう。

◎　調査の整理

現地調査終了後土器洗いを一部事務で行なっていたが、10月初旬市民プール管理棟を整理復元記録の作業場として遺物をはじめ関係資材を搬入した。10月11日から11月10日まで土器洗いと注記を行ないその後復元、記録作業を続けて来たが3月6日各調査員から報告書原稿が揃い報告書の編集を行った。

（小野沢　捷）

第２章　遺跡の立地と環境

遺跡の立地と環境

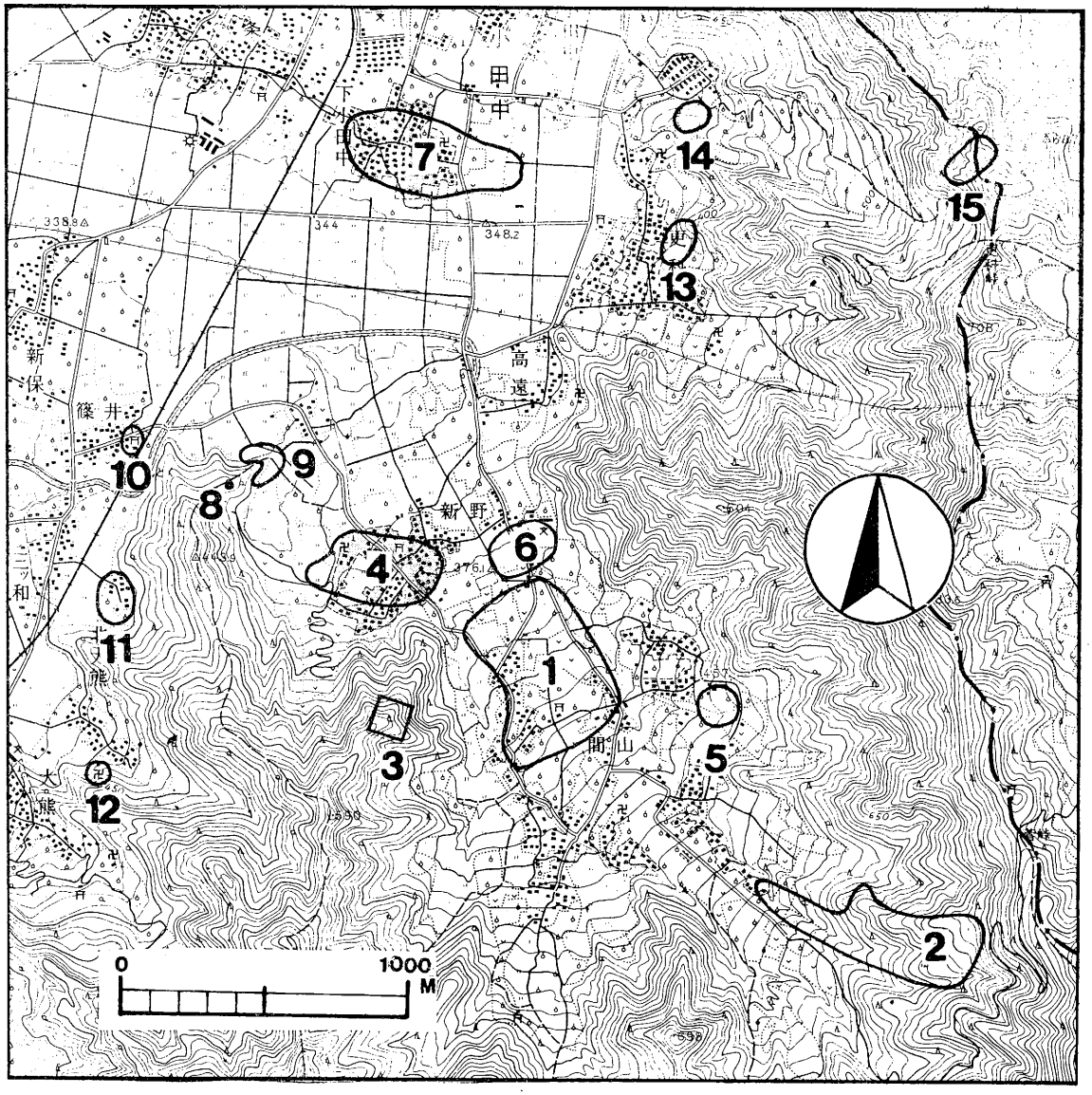
間山遺跡は斜度約５度の傾斜地上に存する間山部落の北西下方にあって、十二川と裾無川にはさまれた扇央部に位置している。標高は340～420ｍ程で、面積約25haの広範囲に及ぶ遺跡である。間山部落は三方を山に囲まれ、南東の中央最奥部を剣の峯と呼んで標高1,179ｍを最高峯に北は箱山まで西は小布施町と境を接する桜沢に至っている。その山脈の途中から間山を包むように支脈が西北へとはしり、広大な中野平の低湿地へ埋没している。間山の北西を下ると新野、高遠部落を経て中野平の低湿地へと至る。剣の峯から更に南東は山田の奥山へと重疊と峯々が続くが南の尾根を下ると高山村坪井に達し、東の尾根に登ると眼下は山ノ内町菅である。この浅い山襞の水を集めて間山の南に裾無川が、北に十二川が傾斜が急なために可成深い谷を作って流れ下り新野、高遠部落の下からは天井川となり篠井川に合流している。二本の川とも普段は水量が少なく灌漑に足る程度の流れであるが、豪雨や長雨の時は暴れ川となって河岸を洗い、耕地や家屋にもしばしば被害を与えてきた。間山から新野にかけて扇状地様に思えるのも、この川の作用が加わっているものと思われる。間山遺跡は山ふところと水の確保、肥沃な土壌を利しての自然環境に恵まれ縄文時代から現在に至るまで長い間人々の生活の舞台となった一大複合遺跡である。

（小野沢　捷）

第１表　周辺遺跡分布表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
1	間山遺跡	間山・津島石動下	扇状地	（縄）前期土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、石錐、敲石、磨石、石皿、石臼、凹石、環石 （弥）後期土器、太形蛤刃石斧、磨石鏃、環状石斧、石槌 （古）銅鏃 （平）土師器、灰釉陶器、管状土錘、鉄斧 （昭33年発掘）
2	建応寺跡	間山・建応寺	山腹	（平）堂宇址５ 土師器、灰釉陶器、銅製御正体、鏡板片、鉄釘

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	立地	遺　構　・　遺　物
				(中) 陶器(珠洲)、砥石、土師質土器、宋銭 (昭53. 54. 57年発掘)
3	小曽崖城跡	新　野	山　上	(中) 青磁片、陶器、古銭
4	新野遺跡	〃　・宮　下	扇状地	(縄) 土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、石錐、石皿、石棒 (平) 土師器、須恵器
5	岸　梨　〃	間山岸梨	山　麓	(平) 土師器、
6	新野上東　〃	新　野	扇状地	(平) 土師器、須恵器 (中) 内耳土器
7	下小田中　〃	小田中・東屋敷	〃	(弥) 後期土器 (古) 土師器、須恵器 (平) 灰釉陶器 (昭46年発掘)
8	金鎧山古墳	新野・金鎧山	山　頂	(古) 積円 (径21.0、高2.6)、合掌珠文鏡、五鈴鏡、勾玉3、管玉1、丸玉90、小玉49、臼玉36、貝輪1、剣3、直刀5、矛2、鉄鏃250、斧頭1、鋸2、砥石、環鈴、鉸具、留金具、土師器、須恵器、人骨 (大14. 15年発掘)
9	行人塚遺跡	新野・行人塚	平　地	(平) 須恵器
10	篠ノ井館跡	篠ノ井・山崎	平　地	(中) 堀
11	三ツ和遺跡	北大熊・日影	山　麓	(縄) 打石斧 (弥) 後期土器 (平) 土師器 (中) 骨蔵器
12	大円寺　〃	大熊・原	〃	(弥) 太形蛤刃石斧
13	中　郷　〃	更科・中郷	山　麓	(縄) 前器土器 (平) 土師器
14	伊勢山下　〃 (更科裏の山)	〃　・裏の山	〃	(縄) 早・前期土器、礫器、石鏃、打石斧、磨石斧、石錐、石匙、石刃、石皿、磨石、凹石 (昭43年発掘)
15	ヶ釜ヶ嶽城跡	〃	山　頂	(中) 城跡



第１図　周辺遺跡分布図

第３章　歴史的環境

(1)　日野村と間山遺跡

日野村誌によれば「本村（間山村）は往昔は日野郷・和名抄（937年頃）に高井郡五郷の一つの日野（日牟乃）と出づ真山村と称せり」とある。当時の日野郷は、延徳沖の東山麓一帯から小布施に及び、高社山麓、東は山の内町に及ぶ地域で旧日野村はほぼその中央部に位置している。この地域には数多くの著名な遺跡が分布して有史以前より人々の住みやすい所であり、その時代時代の文化がうけつがれて来ている。

(2)　間山遺跡と建応寺跡

間山の東南の山ふところにある建応寺跡は昭和57年の第３次発掘まで中野市教育委員会の手によって調査が行なわれた。その結果、広大な遺構や御正体ほか数多くの貴重な出土遺物があった。しかしこの大伽藍がいつの頃建てられたものだろうか、またこの伽藍をささえた歴史的背景はどうだったろうかが話題になっていた。

建応寺の創建は日野村誌によれば「大同の頃創建、田村麿将軍開基にして」とあるが発掘調査の結果からは実証されるに至らなかった。

第３次発掘調査が終った昭和57年12月、千葉大学大川直躬教授が現地調査をされた結果建応寺の建築について、次のような指導をいただいた。それによると最も古いのは３号堂跡の礎石の構造から上限は平安時代にさかのぼる形式であるが、それ以降もこの形態が続き、２号堂跡は鎌倉中期以降ならばいつの時代でも建てられた可能性のある形式である。第３号堂跡は他の二つに比べて規模も大きく平面もかなり発達したものであるのでこの方は時代がそれより下がるものと思われる（中略）筆者（大川先生）はいまのところ室町時代の建築であろうと推測している。（後略）のことから建応寺の創建は平安時代末にまでさかのぼることができる。一方村誌には当時の間山村落は「雲井嶽の内字建応山の中、真渓澗にあり本村を距る凡十町余なり」とあるが現在のところ未調査の地域でわずかに鏃が表採されたことがあるとか、古い石垣らしい遺構がわずかにある程度確たることは不明である。今回の間山遺跡の発掘調査で建応寺跡から出土した遺物と同時代と思われる多数の土師器片や須恵器片、灰釉片等が出土していることから建応寺の隆盛当時には間山遺跡やその周辺にも集落があったものと推測される。

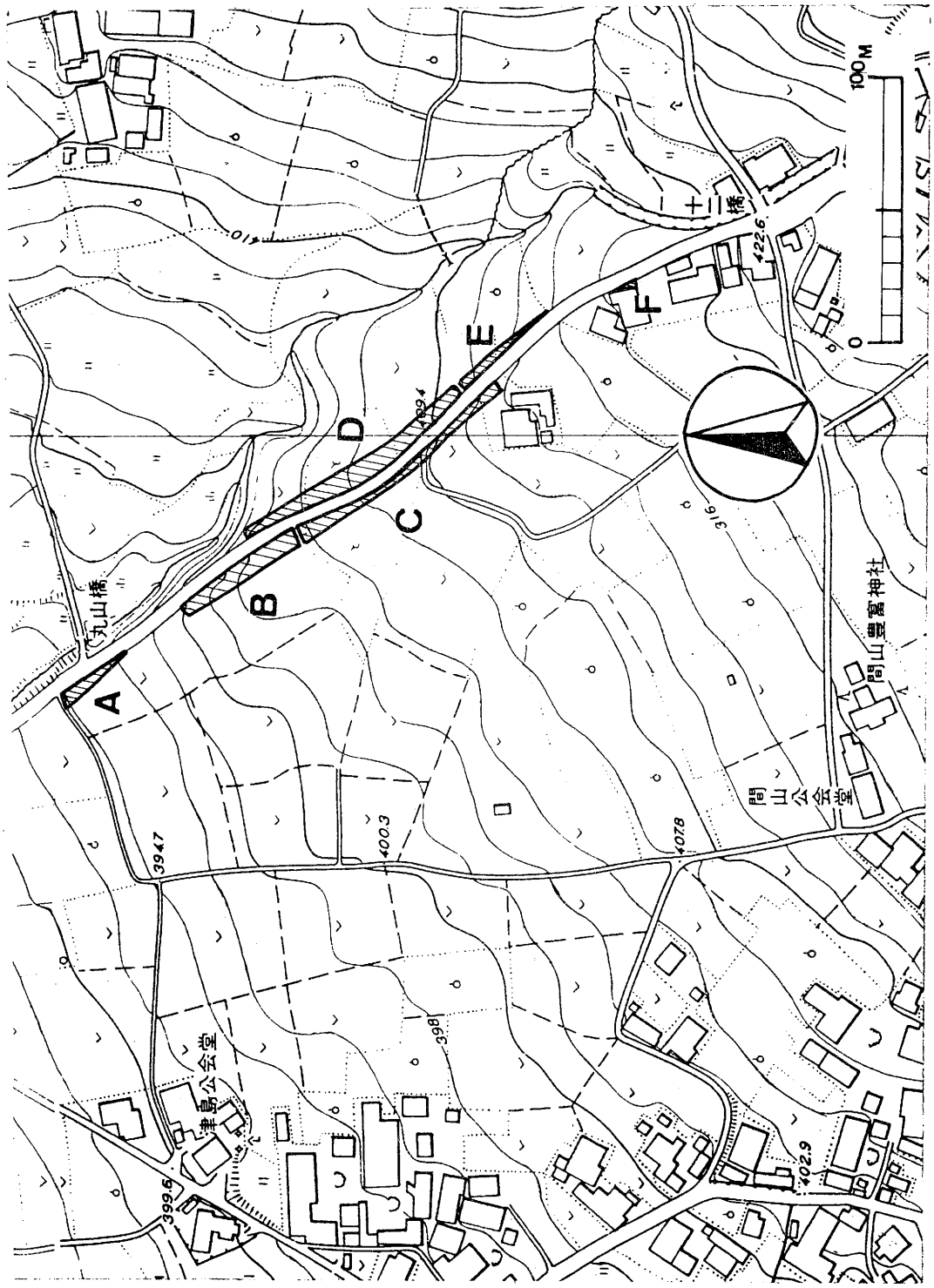
(3) 中世以降の間山のようす

村誌の管轄沿革の項に「年暦詳ならず本郡日野城主高梨氏領す、某代より領せしか不詳、年月不詳、本村へ城廓を築き幕下某を以て城主とし（一つに間山與二郎）本村を領す。後高梨氏に帰すと見ゆ」又真山城の項に「建久中（1190～1200年）高梨七郎盛光之を築き真山城とし旗下を交番せしむ。」とある。

金井喜久一郎先生は真山家の文書や間山にのこされている文書等から上記真山城主は諏訪氏（後に真山氏を名乗る）であり、間山の領主であったと考證された。観応3年（1352）諏訪左近蔵人が足利尊氏の軍中催促状をうけて一族と共に奥州に出陣した。その後高梨経頼が間山を領有し、以後高梨氏の所領となる。

間山遺跡は地味もよく水利の便もよく生産石高も近村より多かったことは近世の検地帳から推察される。間山遺跡は立地条件にめぐまれ往古より人々が住みつき、古代中世以降豊かな経済力基盤に領主真山氏の治世と相俟って建応寺などの遺産をのこしたものと思われる。

（小林軍司）


A
B
C
D
E
F
丸山橋
津島公会堂
間山公会堂
間山豊富神社
399.6
394.7
400.3
398
407.8
402.9
422.6
100M
0

第２図　調査地区設定図

第４章　発掘調査の記録

１　Ａ地区

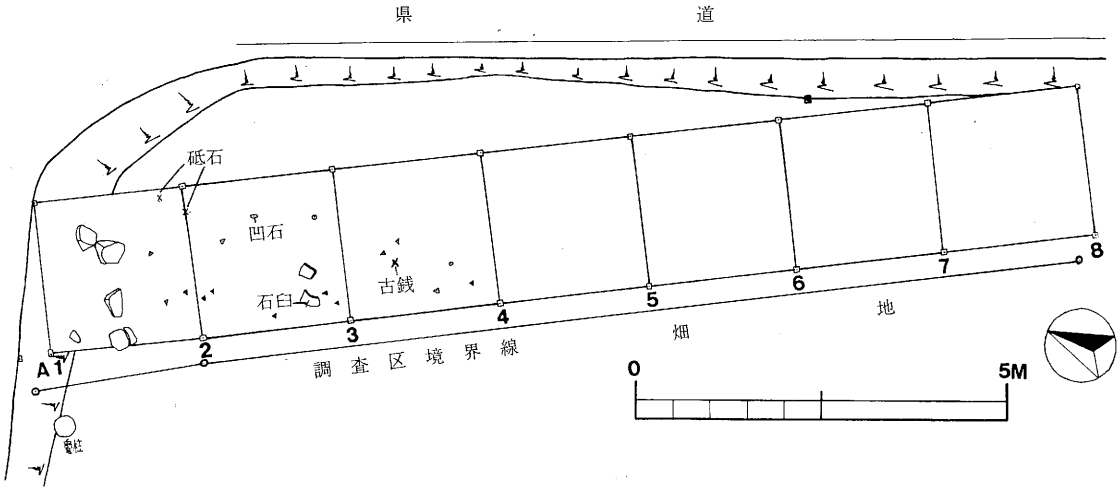
Ａ地区は県道拡幅施工予定地の右入口にあたり十二川までは10ｍ余の地点にあたる畑地で現況はアスパラを栽植している。北西へ傾斜５度の県道が往時の自然地形面と考えられるが、当該畑は削平によって、ほぼ平坦となっている。（第２図）

調査坑は県道に並行して７グリッドを設定して発掘調査を実施した。（第３図）

（１）遺　構

設定した７グリッドは表土（黒褐色）で、20～25cm、２層以下は暗褐色土層が20～45cmと続き、それ以下は地山となり、角礫に砂まじりの褐色土層である。第２層までは畑地造成時の削平による層序の攪乱がみられた。県道は古道を中心に数次の拡幅によって現在に至り、この畑の県道沿いには石垣が積まれている。

以上のような事情で調査地からは遺構の検出は皆無であった。ただＡ－１北西隅には、



凡　例
△土器片
◎凹　石
×古　銭

第３図　Ａグリッド設定図及び遺物分布図

角礫の集石群があり、畦畔の土留めとしたと思われる跡で、ここからは砥石片２点、内耳土器片数点が検出された。

（２）遺　物

検出された遺物はいずれも攪乱・混入状態のもので、第４図より編年順に概要を述べたい。

縄文時代

１は凹石で表裏に２孔をうがち、8.6×7.7cmのほぼ円形の安山岩質の円礫である。２は粘板岩製の尖頭器片で基部は欠損している。

弥生時代

３・４は弥生時代後期（箱清水式）の土器片である。このほか磨耗の甚しい44点の細片がある。３は甕の口縁片で櫛描文を付し、４は壺底部片で、底裏には長さ5.5mm、最大幅３mmの籾痕があり、胎土焼成とも良好で内外黄褐色を呈している。

平安時代

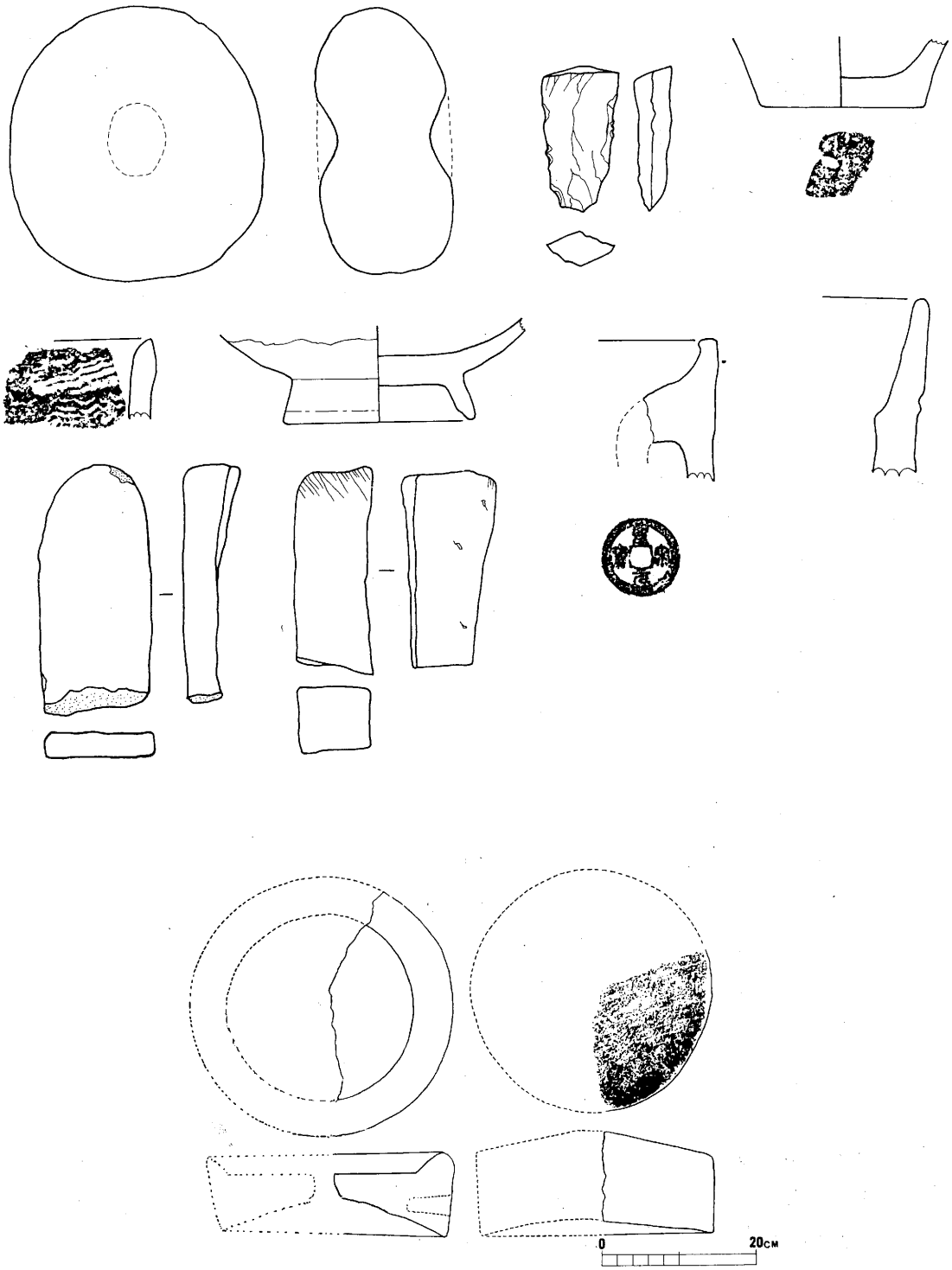
５は高台付坏の破片でロクロ整形のあとがよく見られ、内側と外側の一部は乳白色の灰釉が施され、かなり良質のもので、Ａ－２から検出された。糸切底をもつ国分期の土師器片は、Ａ－２より110点、Ａ－３より１点、Ａ－４より117点、Ａ－５は７点の合計235点の細片を検出したが、いずれも磨耗した細片であった。

中　　世

６・７は砥石片で沼田石の中砥で磨耗し、６は特に磨耗が甚しい。８・９は内耳土器片で８は内耳痕を残し、胎土焼成ともに良好で内面は赤褐色を呈するが、外面は煤のため黒褐色である。内耳土器片はＡ－１から２点、Ａ－２からは16点を検出し、口縁は６点で４個体分と推定される。10は北宋銭の聖宋元宝であるが相当磨滅している。Ａ－３の地表下30cmから検出した。

11・12はＡ－２から発掘された石臼片で10は径34cm、11は径31cmの破片で６分角の刻みが僅かに残っている。

（金井汲次）



第４図　Ａ地区出土遺物

2　B地区

県道右側のアスパラ畑に41ヵ所のグリッドを設定し、約164m²の面積を発掘調査した。アスパラの根が地中深くまで張り、礫も混在しており発掘作業は困難であった。(第5図)

(1) 遺　物

BA－6・8・10・15、BB－12の5ヵ所のグリッドから、数点の土師器片と1点の灰釉陶器片が、散在的に出土したのみで、他のグリッドからの遺物の出土は皆無であった。出土した土器片のうち最大のものでも、3×2cmの土師器口縁部の破片であり、他については、摩耗した細片ばかりであった。耕地造成の際に、攪乱されたことにもよるのであろうが、この調査区が、遺跡中心部より多少はずれている地区に当るものと思われる。

(酒井健次)

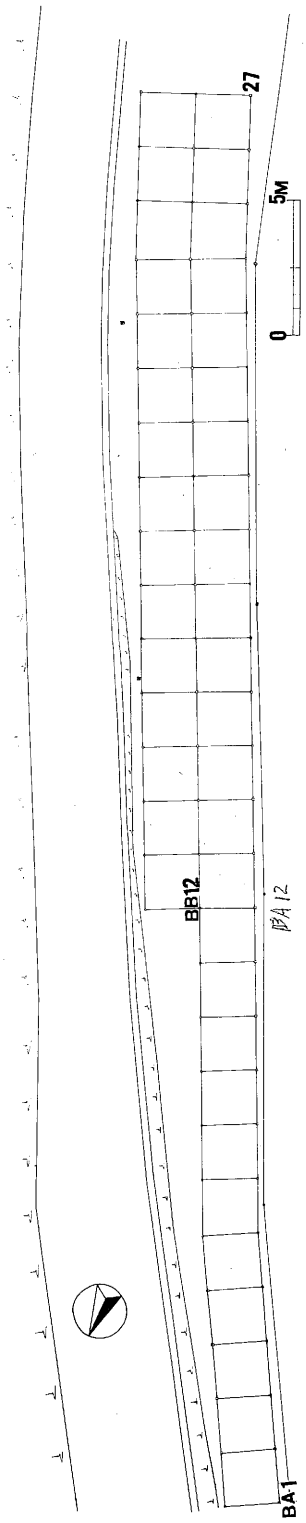
3　C地区

この調査地は、B地区の県道拡幅工事予定地の左側上部にある段状の畑地で、現在は、アスパラガスが栽培されている。また一部は県道から西へ通じる農道を挟んで、プラスチック工場がある裏側の県道拡張区間である。従ってC－1～C－8及びC－23・24のグリッドを設定し発掘調査を行なった。(第6図、第7図)

(1) 遺　構

土師住居址

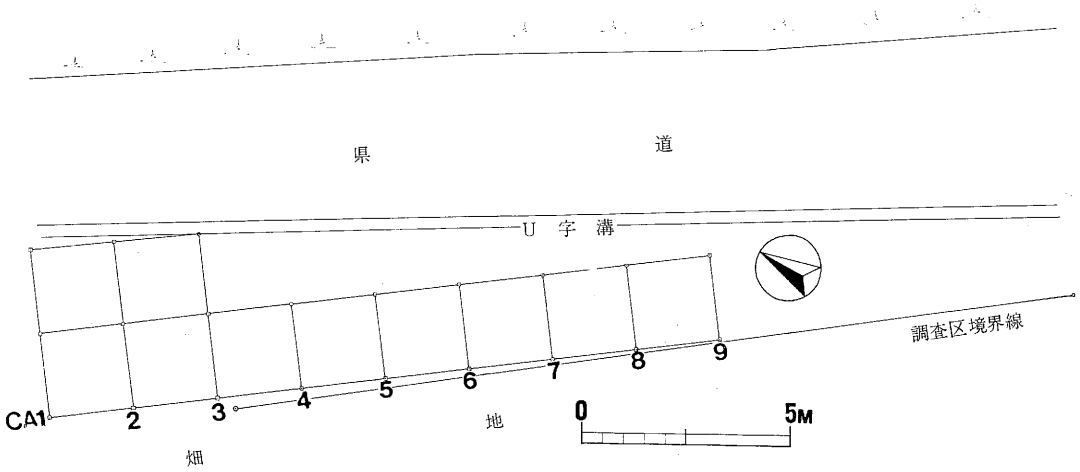
本調査地で確認検出した遺構は、グリッドC－6～C－8の間で、特にこの地区特有の表土(黒褐色)下角



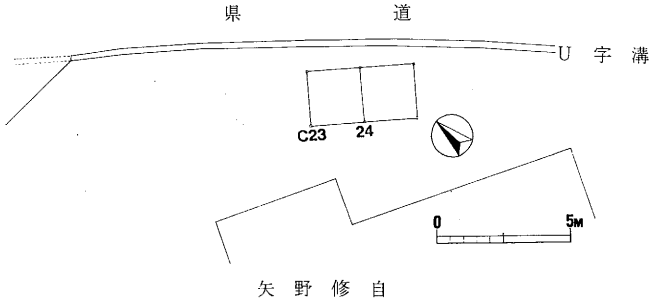
第5図　B地区グリッド設定図

礫土層、表土は黒褐色で25～45cm、その下層はこの地区特有の角礫混交黒土層45～90cmであり、以下は地山で褐色砂礫層となっている。

南側は、地表下60～70cmで角自然石が２個、右上に１個、またほぼ中央に20×25cmの石を中心に５～６個を検出した。この石は上部南側よりずり落ちたものと思われる。更にその石を取り除いた結果、東側県道端下から60cm離れた地点より、13～20cm、長さ１ｍ80cm。



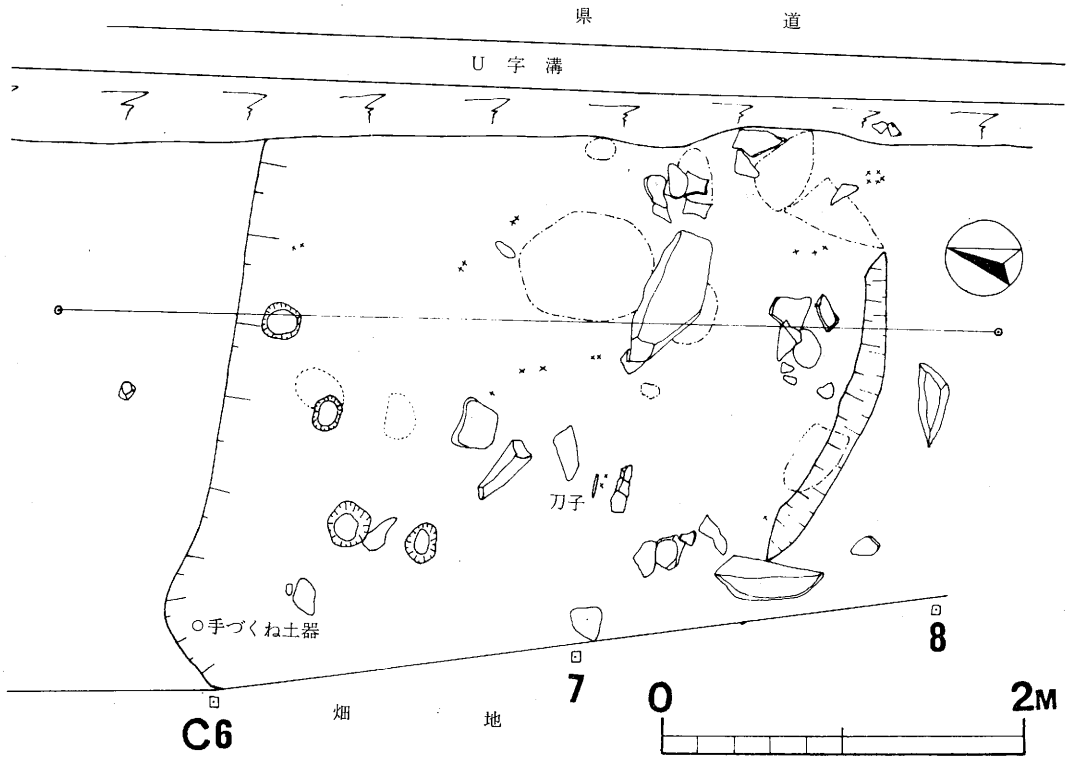
第６図　Ｃ地区グリッド設定図



第７図　Ｃ地区グリッド拡張地設定図

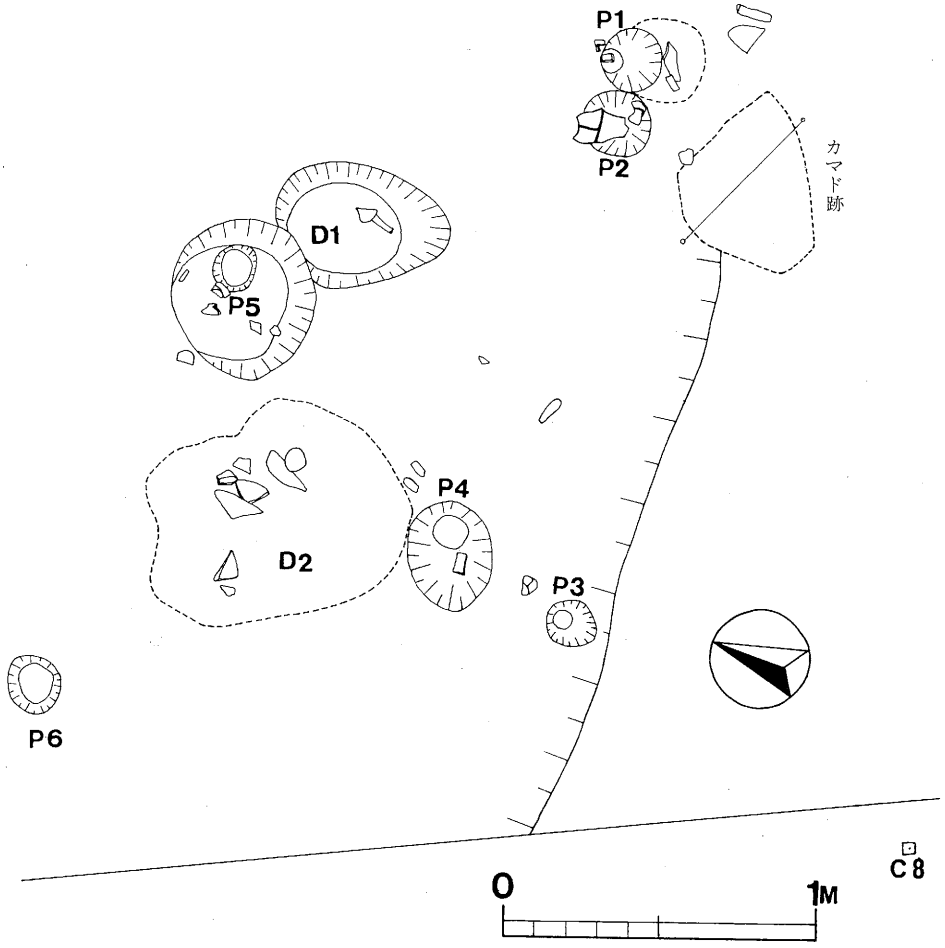
東側に50×40cm、厚さ10cmのカマド跡があり、その北15cm離れたところに、25×30cmのカマドが崩壊したとみられる焼土が広がりこの焼土に少し重なってＰ１があり20×20cmの中に10×15cmの石が落ち込んいた。。柱穴はＰ３が15×15cm、深さ9.5cm、Ｐ４は、35×25cm、深さ21.5cm、Ｐ５は15×13cm、深さ21.5cm、Ｐ６は18×16cmでＰ５東側には55×40cmの第１土壙を中央やや西側からは80×70cmの第２土壙の検出を見た。

断　　層　　図



凡　例
×土器片
土器小群
焼　土

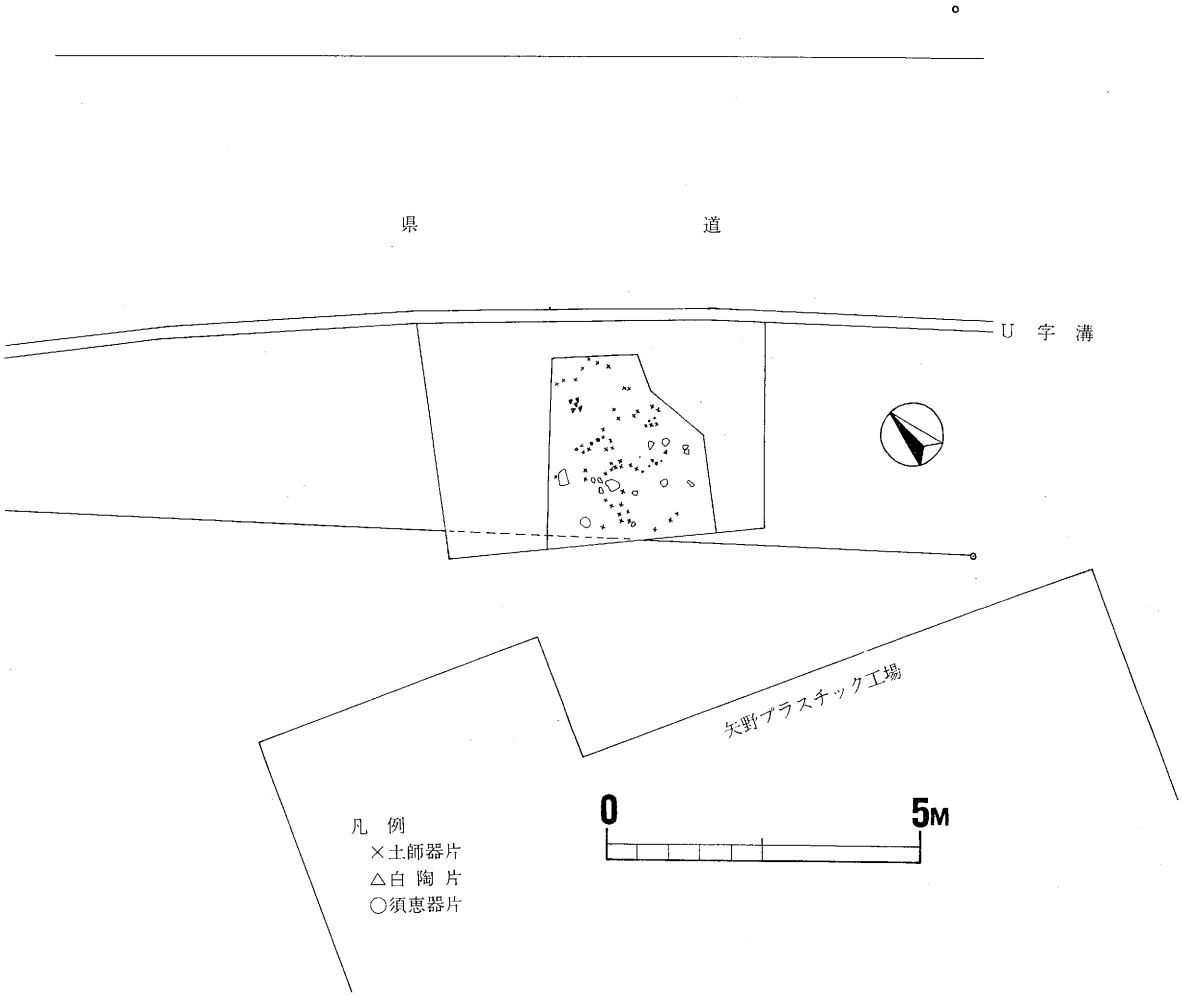
第８図　Ｃ地区住居址平面図及び遺物分布図



第９図　Ｃ地区住居跡柱穴及び土壙掘下げ完了図

（23～24グリッド地点）

グリッドＣ－23～24では、黄褐色耕作土50cmに土師遺物層で、その下25cm黒色土、焼土、木炭片が検出され、地山は褐色砂礫層となっている。（Ｃ地区の遺物は第11、12図の通りである）



第10図　Ｃ地区拡張部実測図

（2）遺　物

検出された遺物は、図表の他、住居址内出土のてづくね土器１と刀子１がある。てづくね土器は、グリッドＣＡ－６で検出した。口径4.5cmで、底部まで0.9～1.2cmと器面は凸凹がみられる。内部径も3.5×4.3cmで卵型を呈し底部に焼成前につけられたＵ字型の溝状痕跡がある。口縁部内側長さ４cm、深さ0.4cmの剝離痕が、また反対側口縁部内側1.5cmにつづいて外側に長さ１cmの楕円形を呈しており全面に剝離痕が見られる。内部に鉄分粒と長さ0.3cm、幅0.1cmの長石の小石が見られる。器高は2.5～1.8cmで、内外共に茶褐色を呈しており、重さは56ｇである。刀子は全長10.2cm、最大幅1.1cm、背部0.5cmで、表裏及び峯部刃部等が錆化しており、柄の部分が欠如しているため、原形は不明である。土師住居址より縄文前期関山式土器片、弥生後期箱清水式土器片、土師器片、灰釉片などが検出された。

（23～24グリッド）

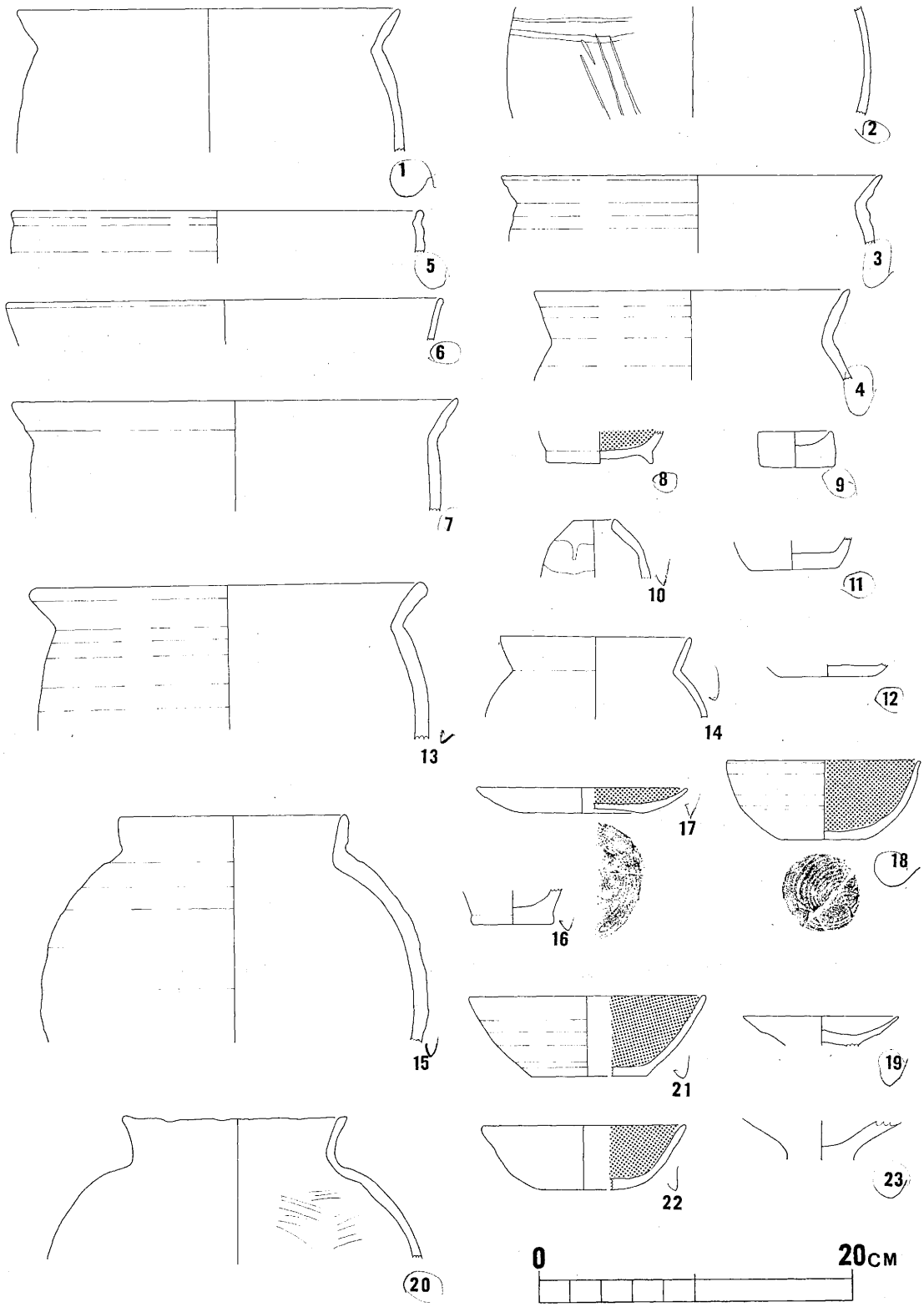
灰釉高台付椀型土器はＣ－24よりの出土で最高厚部が0.7cmと比較的薄手作りで、胎土焼成でともに良好である。高台も1.5cm、口径16cm、器高7.7cm、底部6.5cm、椀型内外ともロクロ整形されており灰色残部３分の１以下である。

なお縄文前期関山式土器片、包含層より弥生後期箱清水式土器片、土師器片、須恵器片、灰釉片など検出された。

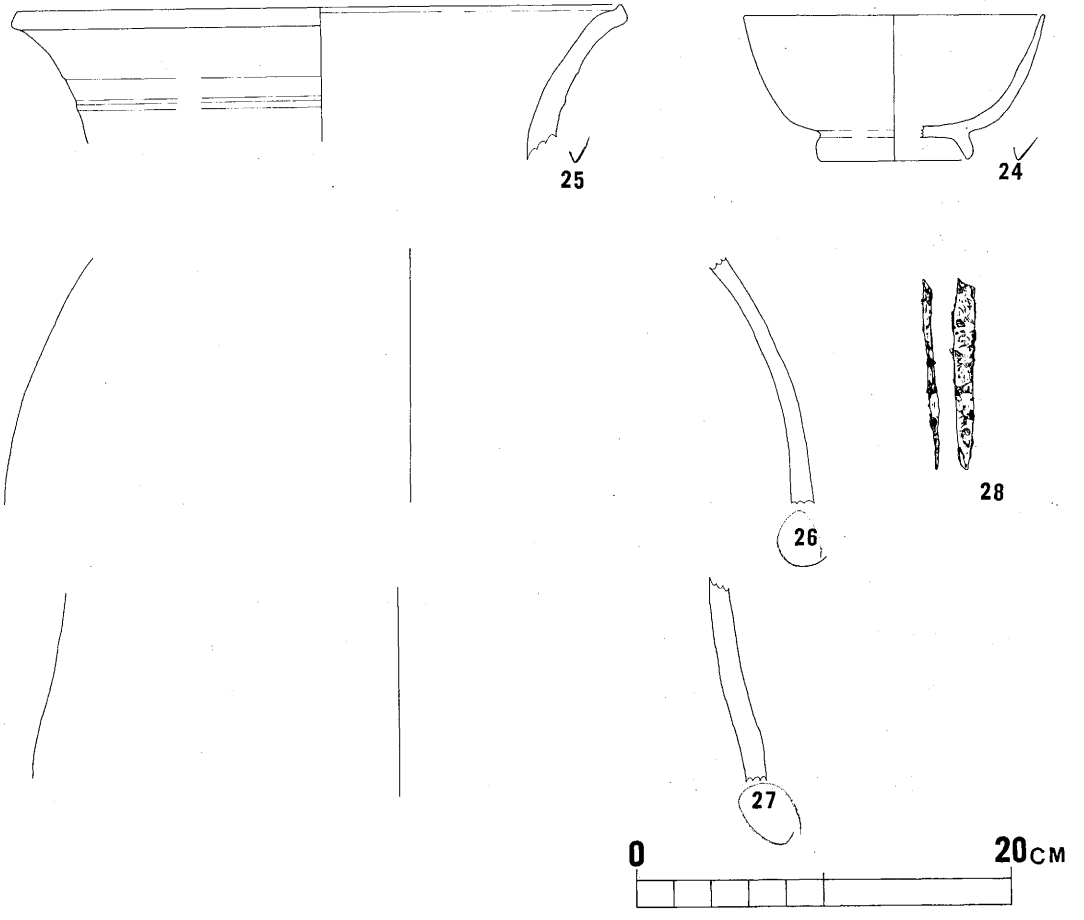
（池田実男）

注

桐原　健　「長野県中野市間山石動下遺跡調査予報」『信濃』Ⅲ10－12　昭和33年〔1958〕



第11図　C地区出土遺物実測図



第12図　C地区出土遺物実測図

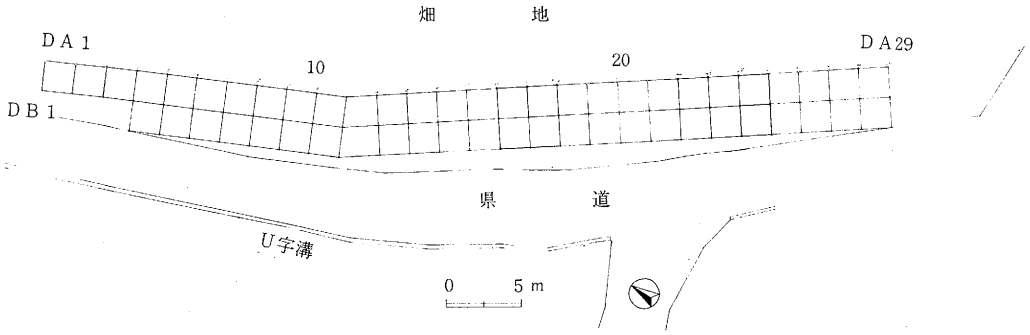
4　D地区

D地区は、今回の調査区のほぼ中央部分からやや上方に位置し、道路をはさみC地区の東側に当る。現在は、道路のわきより旧地形を、30～50cm程度削り取り平坦面を作り、主にアスパラ栽培の畑地として利用されている。そして調査区より十二川へと多少の傾斜を持ちながら下っている。(第2図)

D地区には、下段より2m×2mのグリットを55ヵ所設定し、総面積212m²を調査した。(第13図)

層序は、第1層に厚さ8～10cmの表土があり、第2層に耕作土を厚さ約20cmを測る。第3層は、15cm程度の礫を含む黒褐色土層であり、厚さ約40cmを測る。第4層は、3cm程度の腐食した小礫を含む黒色土層で厚さ約20cm以上である。

本調査区からは、縄文前期・弥生後期・古墳時代前期にわたる各時代の遺物が検出された。しかし、D地区全域にわたり開墾のため攪乱がはげしく、正確に各時代の文化層をとらえるまでには至らなかったが、相対的に各時代の層位的まとまりを認めることができた。縄文時代前期の遺物は、表土下約30～70cm(旧地形では、60～120cm)にその分布の中心をもつ。弥生後期・古墳時代前期の遺物に関しては、表土下約20～30cm(旧地形では、50～80cm)にその分布の中心をもつ。しかし、それはあくまでも相対的なものであり、所によっては、時代が逆転する箇所もあり、真正性に欠ける点も多かった。



第13図　D地区グリッド設定図

（1） 遺 構

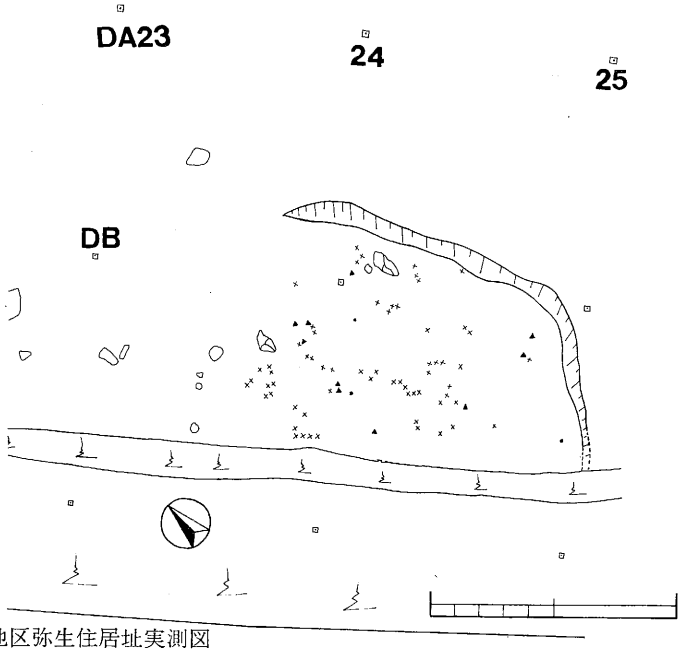
Ｄ地区において検出された遺構は、弥生時代住居址と集石址との２例のみであった。

弥生時代住居址（第14図）

Ｄ23からＤ24グリッドにかけて、弥生時代後期に位置する住居址１軒が検出された。住居址の大半が、現道路下に入り込んでいるため全体の規模等把握できなかった。検出できた限界の中で観察すると、住居壁は、肩部を削平され残存部約20cmの高さで、Ｄ24とＤ25グリッドの境界地点から北東方向約1.5ｍ伸び、隅丸に90°角をとり、北北西方向に２ｍ伸びた所で消失している。遺物は、約４㎡の範囲から弥生時代後期（箱清水式）土器片を主に小量の縄文土器及び黒耀石が合計85余点出土した。柱穴及び炉址を検出すべく遺物を取り除き精査したが、検出することはできなかった。更に、住居址内外における本遺構と関連すると考えられる遺構の検出もなかった。

集石址（第15図）

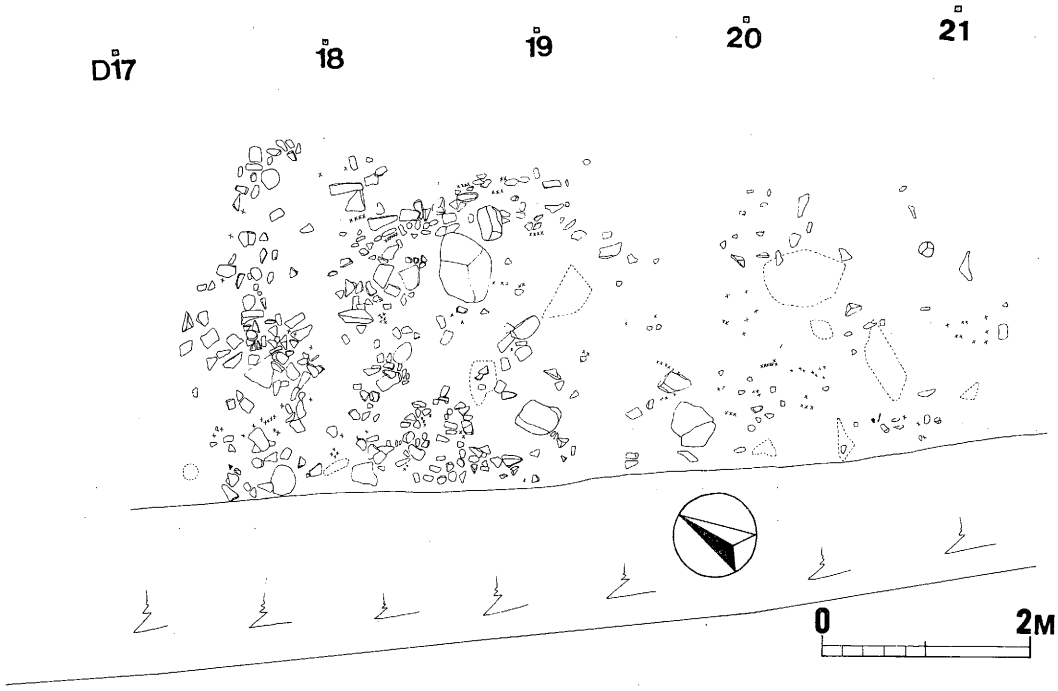
本遺構は、縄文時代前期の土器片が検出されたＤ16グリッドに続く状態で、Ｄ17～Ｄ21グリッドにおいて表土下１ｍ前後において検出された。大形のもので70cm×50cmの礫から５cm×５cm程度の小礫までが散在していた。礫はすべて自然石であり、加工及び他の二次的作用をうけた形跡はなかった。住居址と同様、遺構の一部が道路下へ入り込んでいるため明確な性格等をつかむことはできなかった。大小の礫の分布については、Ｄ17～Ｄ18グリッドにかけて、その密度を濃く分布している。配列については、明確にその規則性を見い出すことはできなかったものの、中央付近に大形の礫が分布し、その周囲を取り囲むように内側に直径約2.5ｍ、幅約0.5ｍ、外側に直径約３ｍ、幅0.35ｍの環状を呈した石帯が、南東方向に開いた状態で半円形に分布している。Ｄ19～Ｄ20グリッドに至っては、集中というよりも散在という感が強かった。遺物の分布は、集石による半円形の中



第14図　Ｄ地区弥生住居址実測図

心部付近に２箇所、Ｄ20グリッドに数箇所、集中分布する所が検出された他には、大小の礫の間にある程度のまとまりを持ちながら集石全面に細片ではあるが、分布している。また総数的にも、Ｄ地区内で一番土器の出土量の多かった地点でもあった。内容的には、高坏、壺、坩等の出土が、他に比べ多く、Ｄ地区内においても他地点との特異性を示めすことから、直接的に生活に関連する遺構と考えるよりも、祭祀や葬制に関連する遺構であると考えた方が妥当であろう。記録した後、遺物及び礫を取り除いて、集石下の遺構等の有無について精査したが、土壙等の遺構の検出はなかった。今後、他遺跡における類例の収集、研究が必要である。

（徳竹雅之）



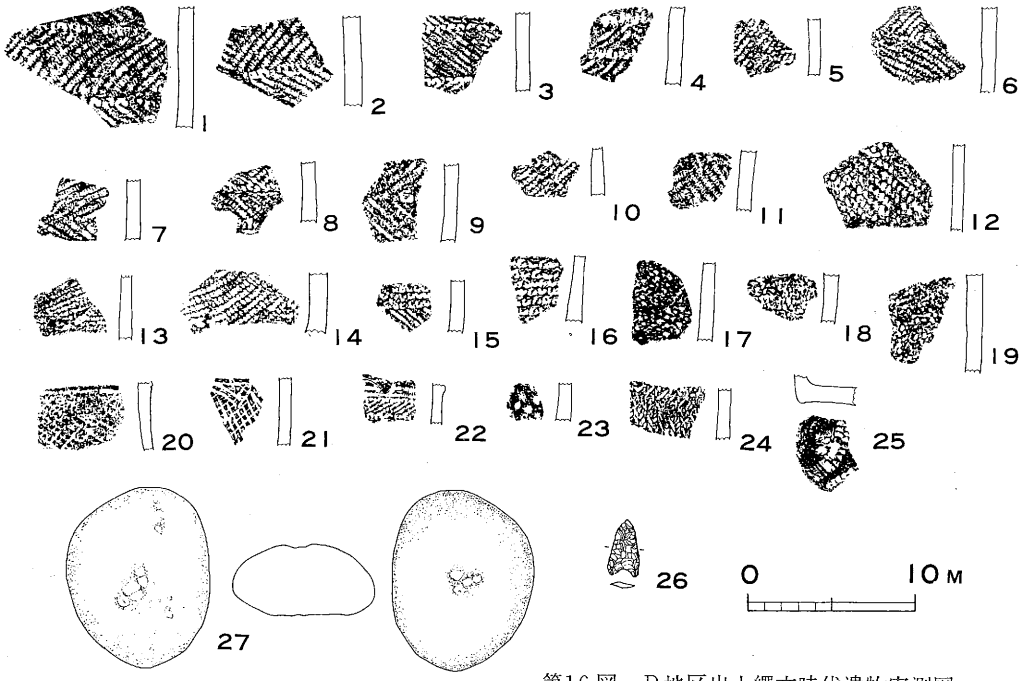
第15図　Ｄ地区集石址実測図

（2）遺　物

Ｄ地区において、遺物の検出された地点は規模の大小はあるが、Ｄ５・Ｄ６、Ｄ12、Ｄ16（第16図）、Ｄ17～Ｄ20（集石址）、D23～D24（住居址）の５ヵ所であった。時代については、Ｄ６、Ｄ17～20グリッドをのぞき、ほとんどが弥生後期の所産であった。例外的であったＤ16グリッドからは、弥生時代の遺物のやや下層より縄文前期の土器片が、そしてＤ17～Ｄ20グリッドからは、レベルを差ほど異なることなく土師器片が、弥生時代の土器片と同数量程出土した。以後、時代を追って考察を述べる。

縄文式時代

今回の間山遺跡の調査で羽状縄文土器片などが検出されたのはＤ地区及びＣ地区ｂ地点（23～24グリッド）、Ｅ地区16グリッドなどであるが、特に集中して出土したのはＤ地区（イ）16～17グリッドと、（ロ）23～25グリッドである。Ｄ地区で合計43点が検出されたが形状の察知できる破片は無かった。（イ）地点は耕作土（黄黒褐色土）20cm、下20～30cmは黒褐色土で箱清水式土器片が僅か包含し30～70cmが黒色土で羽状縄文土器片などが、前者とほとんど層位を接して発見され－70cm以下では検出されなかった。以下20cm程で黒褐色土が終り砂礫の多い黄褐色の地山層となる。また－50cm附近に平盤な石が２個みられたが、



第16図　Ｄ地区出土縄文時代遺物実測図

遺構は検証できなかった。（ロ）地点は－30cm附近で検出されたが、耕土及び基盤層が浅く－40cm程で砂礫層となっていた。

遺　物（第16図）

図示した拓影土器片のうち、いずれも多量の繊維を胎土に含有する。ただし20・21は少量である。焼成は脆弱のものが多く器面の色調は黒褐色から黄褐色の範囲の土器片である。第１類は縄文施文の土器片でａ羽状縄文のもので結束文がつくものがほとんどである。1～3、６～10は横帯、11は縦帯施文である。施文帯幅は器の大小によって違い、１は4.5cm、３は３cmである。ｂは結束のある縄文帯が同斜行するもので4.13で４の帯幅は２cmである。Ｃは施文帯文様の不明な破片部分で抽出した縄文の施文のみのもの５・12・14である。これらの縄文は単節の斜縄文で細いものと粗いものがあり前者はＬＲＲ状をなしている。第２類は15は組紐状の施文が横位にありＲＬ縄文と組合せている。第３類16～18は撚りのつよい組紐文の帯状の部分と思われる。第４類20、21は器体上半の破片と思われるもので斜格子状の平行文のある土器で20は帯状施文の文様帯であるのに対し21はさらに竹管状工具で平行線の下に三角状に文様を施文している。第５類は22は黒褐色の小形土器の破片で結束状羽状縄文の上に半截竹管文を２列配しその上に直径７mmの円形貼付文を配している。第６類23は口縁部分の破片で円形竹管が連続して刺突されている。第７類24は網目状の圧痕のある土器片である。第８類25は底部の破片で底部に竹管或は円形棒状工具の押引文が描かれている。器外面下部にはＬＲ縄文が押捺されている。底部の直径は10cmである。この底部の施文は花積下層式以来の伝統が遺存したものと思われる。以上強いて分類してみたが関山式土器はこれらの文様が組み合わされて施文構成されているので詳細な検証は困難であるが、関山式の古い要素を持った文様のある点を指摘したい。間山遺跡の関山式土器の出土の記録は「下高井」(注)に記載され、今回の調査と合せて考えると相当広範な面積の遺跡と考えられるので関山式土器の出土する遺跡として古くから注目されている山の内町伊勢宮遺跡(注)とともに千曲川下流域の今後の調査が期待される。

その他に、石鏃、凹各１点づつＤ地区内より出土している。

（檀原長則）

引用文献

（注）小野勝年「下高井」　長野県教委昭28

（注）同上

弥生時代（第17図）

Ｄ地区において、弥生時代後期の遺物は、全地区より検出することができた。しかし、包含層が極めて浅く、何度となく開墾等の影響をうけているため、摩滅した細片が多く、完形の出土遺物は一点もなかった。

壺（１）　胴部から頸部にかけてやや収縮し、口縁部に向って大きく外反していく。頸部を境として下方に、６本１単位の櫛描横走平行線を６段施文した後、縦に切ったＴ字文の下に１段の波状文を施文している。集石址内出土。

甕（２）　口縁部は短く外反し、厚手である。胴部は軽く張り、最大径は胴部中央やや上方に位置するものと思われる。頸部に８本１単位の２連止め簾状文が施文されその上方に９本１単位の波状文２段、下方に３段施文されている。Ｄ－12グリッド出土。

甕（３）　胴部から頸部にかけてやや収縮し、口縁に向ってゆるく外反する。口縁端部すぐ下に横ナデにより稜を作っている。頸部から肩部にかけて９本１単位の３連止め簾状文が施文され、口縁部にかけて２段の波状文が施文されている。波状文は、所々に直線的な箇所があり、不規則である。最大径を肩部下にもつ。集石址内出土。

甕（４）　口縁外面に稜をつくると同時に内面にナデにより、かすかに内彎する。４本１単位の櫛描波状文と直線文が不規則に施文されている。集石址内出土。

小形甕（５）　Ｄ地区では１例のみの出土であった。底径約３cm、残存する高さ約４cmの小形甕である。底部より2.5cmの所に残存する範囲で８本の櫛描波状文が施文されている。内面は、ヘラ削りがなされている。底部一部に煤状の附着がある。集石址内出土。

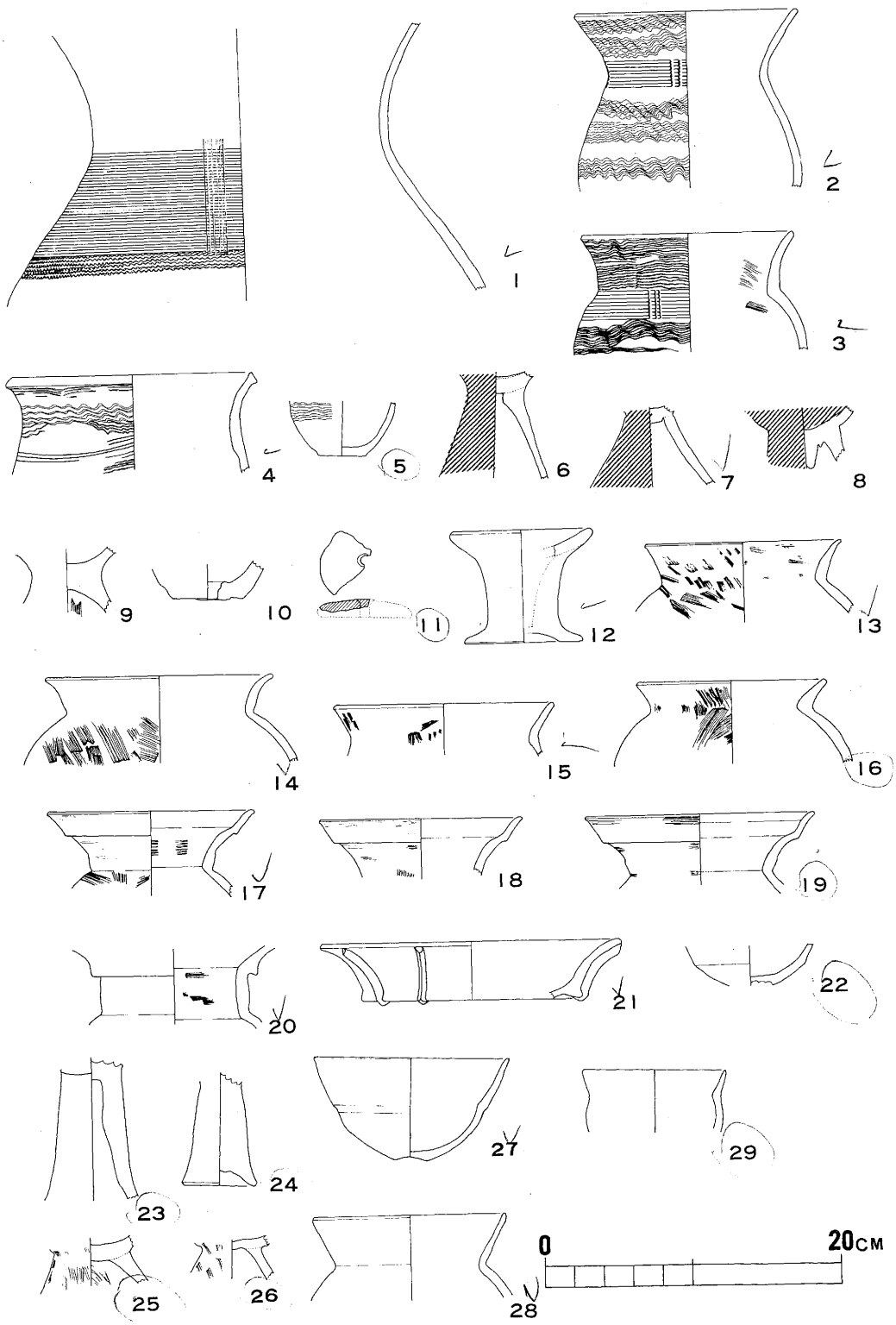
高　坏（６）　坏部及び脚部⅓欠損。坏部と脚部とは、ホゾにて接合したものと思われるが、坏部のヘソが欠損している。外面はヘラ磨きの後、赤色塗彩されている。集石址内より出土。

高　坏（７）　坏部及び脚部½欠損。坏部と脚部とは、ホゾにて接合。内側に直径約1.5cmの突起となっている。外面に一部分赤色塗彩の形跡がある。集石址内出土。

高　坏（８）　坏部と脚部の接合部のみ残存。接合部はホゾにて接合されている。内側に円すい状の突起となっている。

高　坏（９）　坏部と脚部との接合部½残存。坏部と脚部とが一体形成である。本例は今回調査で１例のみの出土であった。赤色塗彩はされていない。内部に縦方向のハケ目調整の痕跡がある。集石址内出土。

甑（10）　底部のみ残存。底部中央に、内面より単孔をうがっている。外面に煤状の附



第17図　D地区出土遺物実測図

着有り。成形が粗雑で、丁寧調整等も認められない。住居址出土。

紡錘車（11）　約1/6残存。上面より垂直の孔をうがっている。集石址内出土。

器　台（12）　手づくねのほぼ完形に近い器台形土器である。大きくスソを広げた底部から垂直に立ち上がり、強く外反し小形で浅い器受部を形成している。ナデとヘラと両方によって調整されてはいるが、著しく粗悪なものである。底部にモミ跡が残っている。次期において精製される器台形態の先駆的遺物であろう。

古墳時代（第17図）

D17～20グリッドにおいて検出された集石址内において、集中的に出土した。前期の遺物と同様で、細片が多かったが、完形とはいかないまでも、器形等多少なりとも推定可能な資料を数点検出できたことは幸いであった。しかし前述した様に、攪乱がはげしく個々の資料をレベル的にとらえることは不可能であったことが残念である。

甕（13）　口縁部から肩部にかけて1/9残存。強く「く」の字に外反する口縁を有する。口縁は厚く、口唇部に至り薄く先細りを呈する。口唇部外下に指頭圧痕が残る。

甕（14）　胴部よりほぼ垂直に立上がり、1/3程度を残して、強く外反する。最大径は中央部やや上方に位置するものと推定する。頸部接合外面に、接合時のものと推定される、指頭圧痕有り。全体的に赤色で粗悪な土器である。

甕（15）　口縁部より頸部まで1/4程度残存。他の資料に比べて、頸部の屈曲度が弱く、肩部の張りが小さいように思われる。砂粒を多く含む粗悪な土器である。口縁部は口唇部に至るまで同じ厚さを保ち、直線的である。

甕（16）　口縁部より肩部にかけて1/2程度残存。胴部より短く「く」の字に外反する口縁を付し口縁端部に至り、かすかに内彎する。全体的に厚手で、内面に粘土まき上げ痕が残る。

壺（17～19）　胴部から「く」の字に外反する口縁の上に、接合部に稜線を走らせている有段口縁を付している。三例とも同様に、稜線より口縁端部に直行して立上がり、口縁端部に至って、再び外反している。口縁部頸部にかけて、(17) 約1/6、(18) 約1/6 (19) 約1/3残存。

壺（20）　口縁部途中から頸部にかけて約1/3程度残存。所謂S字口縁を持つ壺形土器である。胴部より垂直に上方へ立ち上がる長い口縁を付し、接合部において外面にへら削りによって下方から掘り込まれた稜を作る。強く畿内の影響をうけた土器で、搬入の可能性もある。

高　坏（21）　杯部のみ約1/6残存。脚部よりほぼ垂直に外反した坏底部に、強い稜線を作って、ほぼ底部に垂直に立上がりながら大きく外反していく。口縁全外面を刷目調整した

後、山形の突帯を縦方向に付している。残存部では２本確認できるが、等間隔に形成しているものと仮定すると、口縁部周囲に対角線上に12本付着されていることになる。

高　坏（22）　高坏の脚部と口縁端部を欠損脚部との接続部よりやや上方にかすかに稜をもつ。

高坏（（23）　脚部¾程度残存。ホゾにて接合され、内側に不整形な突起が出ている。残存する脚部は、坏部との接合部より垂直に近く下方に直線に伸び、大きく広がるスリ部との接点と推定される所で欠損している。数箇所に赤色塗彩の形跡がある。厚手に形成された焼成のあまい土器である。

高　坏（24）　脚部縦にほぼ½欠損している。(23) 同様に坏部接合箇所よりほぼ下方に垂直に伸びている。しかし、スソ部に至っては、かすかに広がる程度で終っている。内部は、空洞でなく底部に上げ底状に、くぼみを形成する程度である。内部が空洞でないため、坏部との接合はつみ上げによって接合されたものと考える。この成形方法によって作られた高坏は、今回の調査ではこの１例のみの出土であった。

高　坏（25）　杯部との接合箇所からスソ広がりに形成されている。厚手である。坏部と脚部とはホゾによって接合されたものと思われるが、内側の突起物は接合後、ハケによって取り除かれている。

高　坏（26）（25）と同様に坏部との接続部よりスソ広がりに脚が伸びている。接合はホゾによってなされている。内側にかすかに突起物あり。

坩形土器（27）　口縁部が大きく広がりながら、かすかに内彎している。胴部は３cm　、程度と極く浅く、器高の½弱である。底部はややくぼみを持った平底を呈している。

坩形土器（28）（27）同様に口縁部が大きく広がりながらかすかに内彎している。しかしながら、口縁部と胴部との境いに至っては、(27) と異なりはっきりとくびれ、肩部を形成している。

坩形土器（29）（27）(28) の中間的形態の土器である。口縁内面のかすかな内彎を刷毛により作り出している点が他と異なる。また（28）に比べ口縁部の高さが低く、口縁部と胴部との境は、さほど、はっきりとはしない。

考　察

Ｄ地区において注目すべき調査結果は、Ｄ17～20Ｄグリッドにおいて検出された集石址内より発見された古式土師器の出土例である。県内において、土師式土器の諸研究は、藤森栄一氏による茅野市下蟹河原遺跡出土遺物の調査結果が最初の成果である。その後、平出

遺跡、城の内遺跡、海戸遺跡、安源寺遺跡、四ツ谷遺跡、駒沢遺跡、鳥羽山遺跡、堂垣外遺跡、新井南遺跡等を始めとして、資料の蓄積がされるに至り、桐原健氏・湯川悦夫氏・加納俊介氏・花岡弘氏他多くの研究者により、型式学的研究から編年的考察がなされ、中でも概念的に多少の差異はあるが、所謂「プレス和泉」と称される古式土師器の研究が注目されている。今回の調査において出土した古式土師器は、S字口縁を有する壺形土器1例（20）受け口状の有段口縁を有する壺形土器2例（17～19）細身のしまった脚に大きく広がるスリを付した高坏1例（23)、またそれに類似する高坏1例（24)、脚部との接合部よりやや上方の坏部外面に稜をもつ高坏1例（22）杯部外面にはっきりとした稜を作り、山形の突帯を付す高坏（21)、形態を異にする3例の坩形土器（26～28）等がある。これらの資料を花岡弘氏の編年研究の成果をもとにして考察すると、S字口縁土器b類が出現する一方、箱清水土器、中島式土器及び系譜上にある土器はこの時期まで残存すると定義されるⅢ期から新しい様相を示すS字口縁土器D類の他、有段口縁の壺、小型丸底土器、定型化した小形器台等が加わるⅣ期とにまたがるものと考える。Ⅲ期については、上田市枠木第5住居址出土の箱清水土器の系譜を引く小形甕形土器を伴出する例と同様に、今回の調査においても、同集石址内より、枠木遺跡と同様に小形甕形土器（5）を始めとする箱清水の系譜を引く土器片が伴出している。また、東海地方系の元屋敷期の壺形土器に類似する壺形土器（20）が伴出していることもその理由にあげられよう。Ⅳ期については、長野市松代町清野四ツ谷遺跡において注目されているところの坩形土器が、竹内三千夫氏の分類するA類・B類ともに出土していること、また坏部にかすかな稜線を付す高杯（22）が、東海地方系の石塚期の資料に類似する点等がその理由にあげられよう。以上のように古式土師器が、畿内的様相で斉一化されていく過程において、東海との影響を強くうけながら変化していくことを示す資料であることはいうまでもない。また今回は、これらの資料が、直接的に生活と関連するものではなかろうと考える集石址内において発見されていることは、注目されるべき点でもある。しかしながら、前述したとおり、今回の調査においては、攪乱が著しく、これらの資料の細分化及び弥生時代終末期との関連について究明することが不可能である事がとても残念である。

古式土器の研究及びその資料は、年々増加してきているが、すべての諸問題を解明するには十分といえるものではない。これらの資料のいま以上の収積と、その遺構との関連の究明に努力していかなければならないと考える。

（徳竹雅之）

引用文献

（１）今井汲次他　安源寺　中野市安源寺遺跡緊急発掘調査　中野市教育委員会　昭42

（２）金井汲次他　安源寺第３次発掘調査報告書　中野市教育委員会　昭54

（３）矢島宏雄他　箱清水土器　－櫛描文と鉄丹の文化－（研究ノート４）
千曲川水系古代文化研究所　昭56

（４）第２回弥生時代シンポジウム発表要旨　－長野県大会－　昭56

（５）橋本裕行他　信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程㈠　信濃Ⅲ35－４　昭58

（６）橋本裕行他　信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程㈡　信濃Ⅲ35

（７）桐原健　信濃における古式土師器の位置　信濃Ⅲ19－８　昭42

（８）花岡弘　信濃の古式土師器　信濃Ⅲ31－４　昭54

（９）竹内三千夫　長野市松代町清野四ツ屋遺跡の古式土師器　信濃Ⅲ26－２　昭49

（10）花岡弘　信濃における古式土師器の成立　佐久考古３　昭52

5　E地区（第18図）

E地区は今回調査の最上段で南に向って左側に位置し、元所有者は小林博氏である。約35m東には十二川が流れており、岸梨方面より流下する小川と合流している。間山区の丸山、岸梨集落の傾斜面と間山区集落の中心部に位置する間山遺跡の傾斜面との接点を十二川が流れており、河道は縄文式時代から、変化していないと考えられる。E地区の発掘面積は約120㎡で県道の路肩の崩落防止のため、法面を残したので、発掘面積に制約をうけた。地層序は表土（耕作土）黄褐色、黒色土、黒黄褐色土、黄色土で地山層は多量の礫を含んでいる。遺構遺物の集中地点は、3～4グリッド（箱清水－灰釉）、10～11グリッド（国分）、14～15グリッド（箱清水、集石址）の3地点、4遺構で、遺構検出面は住居址以外は30cm程で傾斜地形から3～4グリッドが1m以上の深さとなっていた。

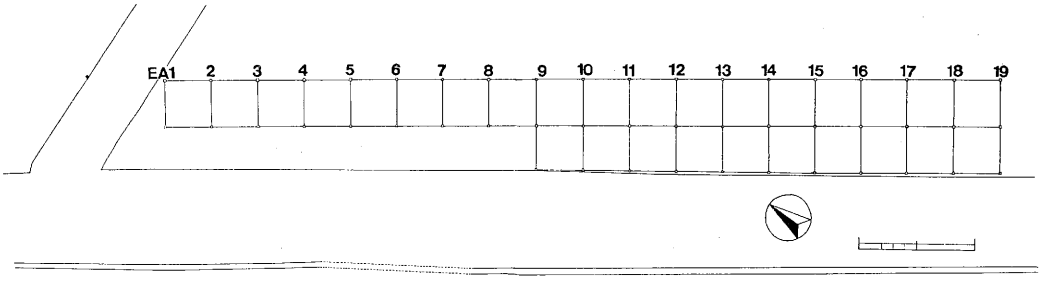
縄文式時代

遺構は発見されず遺物のみ17グリッドより検出された。繊維含有の羽状縄文土器片で4片あり、他調査区の所見により関山期の所産と考えられる。

弥生式時代

3～4地点（第19図）

遺　構　前期の如く包含層が厚く、また後世の攪乱を受けていた。遺物は箱清水式土器片、土師器片、灰釉、須恵器片、鉄片などで土師の甕形土器の破片が－105cmで検出されるなど層序は不安定である。－1mで南北に住居址の壁面と思われる段差が10cmの落込みとなっていたが、小面積のため、プランは確認できなかった。また床面には焼土部分も見られた。甕破片（第26図2）は住居址西側の壁外にあり、甕破片（11）は東南隅に、壺の下半部破片（6）は南西壁面にあった。また高杯脚部破片は床面近くに、また、打製石斧は床面より30cm上の地点より検出された。



第18図　E地区グリッド設定図

遺　物（第４表)(第27図)

小形有柄鏃（14）地表下－70cmで検出された。小形精巧な黒耀石製の有柄鏃で、当地方の該期は縄文晩期から弥生中期の所産と考えられるが、間山遺跡からは該期の土器などの検出はまだ無い。

凹石（７）　ほぼ菱形をした偏平な自然石を利用したもので－70cmから検出された。中央部打裂痕が集中し表裏に利用されている。

打製石斧（９）長さ18.2cm、頭部幅3.3cm、刃部幅5.5cm、厚さ1.8cmの安山岩製の刃部を除いた５面が自然剝離面で頭部には打撃痕が見られる。稜に緊縛したと思われる裂痕が見られ、刃部はかなり土づれがしている。先述の如くこの打石斧は住居面での検出では無いが、極めて粗雑な製作法をとっており、注目される。北信の弥生後期遺跡からは，生産形態の違いから、打製石製農工具は出土しないと言う定説になっており、今後の検討材料となろう。間山地区は現在アスパラ栽培が盛んに行なわれており、高燥で肥沃な耕土を持っている。当時、水稲栽培の容易な平坦地の氾濫原までは1.1kmの距離差があり、生業面に畑作(陸耕)が相当なウエートを占めていたのではあるまいか。また鉄器不足の状態も考慮されるが、しかし土師時代鬼高、国分期までも打製石斧が存在したと言う（１）下伊那地方の弥生後期の立地と似ている点、生業形態の関係や同じ硬砂岩の石斧でも弥生時代の打石器の製法が粗雑であるという神村透氏の発言（２）が、肯定される。また産出地は須坂市の坂田山に同種のものが多量に産すると小野勝年先生に聞いたことがある。ともあれ今後の類例の増加を待ち、検討されるべきだろう。

甕（１・２）　（１）は胴部上の破片で折返し状の口縁をもち、胴部に最大径を有する器形で頸部に櫛描平行文をもち、櫛描波状文で口縁部端まで丁寧に描き、総体的に右上り施文の傾向である。（２）は頸部に６～７cm間に２連の簾状文があり、前者よりやや大形で口縁は平縁である。頸部の簾状文の断絶痕と波状文の断絶痕とほぼ一致する様に思われる。波状文は描きはじめの部分は重複している、また波状が乱れて上下一致せず眼鏡状の文様になっている個所が見受けられる。

小形壺（３）　略

高杯（４）　脚部破片で－70cmより検出されたもので、坏部はホゾにて接合され、内部は乳頭状の突起となっている。外面は赤彩され、脚部に煤状の附着がある。

蓋（５）　略

壺（６）　胴下半部の破片で器厚薄く上げ底状を呈し稜をもつ器形である。

鉄器（10）　略

土師器甕（11・12）　胴上半部の破片で口縁部を欠損する。両者ともに胴部は球形である。外面はロクロ整形後刷毛目整形され、内面はヘラ整形されている。

高坏（13）　脚部の円柱状の高杯破片で塗彩されず外面はヘラ磨きされ、脚内部に刷毛目痕を残す。土師器編年五領期の所産と思われる。その他の出土品は内黒と坏破片、6点、須恵器の甕の破片5点、灰釉の破片3点などである。

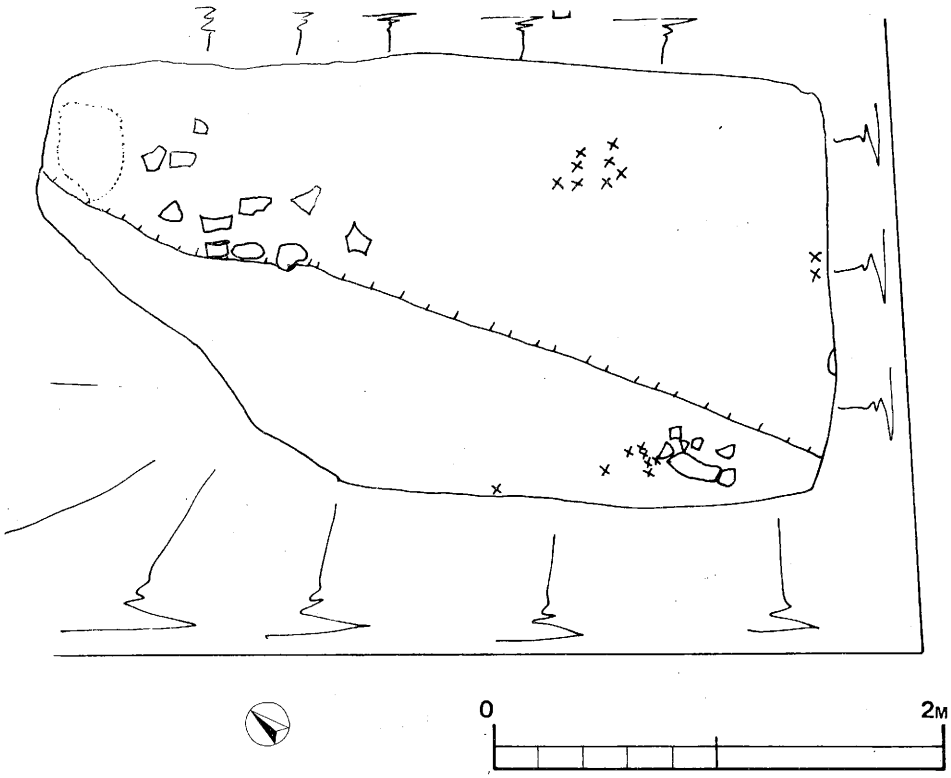
集石墓状土壙（第20・21・22・23図）

遺構　14グリッドから15グリッドにわたって表土を15～20cm除くと、南側はほぼ直線で北下方に流出移動した形跡の集石群が現われた。石は玢岩の自然礫で構成され、後述の弥生住居址上の南側の壁面に長軸を合せて構築されていた、層序は住居址床面よりは約20cm、壁面上からはほとんど接した状態で発見され、集石上からの深さ20～25cmの凹部に集石されていた（第20図）。主体部はＮＥ55°方向で大きな石（20cm内外）を周囲に列石しているが、北側は崩れたと思われた。中に10cm内外の石を集石し、その間隙に土器片が全面に散乱していた。一見して塗彩された土器片が多いのと内側を上に向けた土器片が半数以上を占めていた。中央東より甕、甑の破片が見うけられた。これらの集石を徐々にとり除いていくと、（Ａ）長径2.5ｍ、短径80cmと（Ｂ）長径1.6ｍ、短径60cmの２群の並列となった（第21図）。（Ｂ群）は西側をややつき出した形状であった。壺の破片は一回目の集石のとり除き後に発見され、やや西方にかたよっている。Ａ群の壺（第29図）は底部分を向けて破砕され、Ｂ群には（第30図23）の壺が南寄りに検出された。石を除いて行くと全面に土器片が見られたが、中央西寄りに多く発見され、また壺破片が多く展開し、また散乱して発見された。高杯の脚部分に三角窓のある破片（第28図16）はＡＢ群中間の西よりに、甕（２）、甑（14）などはＡ群の石組外の東北より検出され、また全面より木炭片が検出された。また礫が敷かれた下よりも土器片が検出されて、下の弥生住居址との層序は不明確であった。

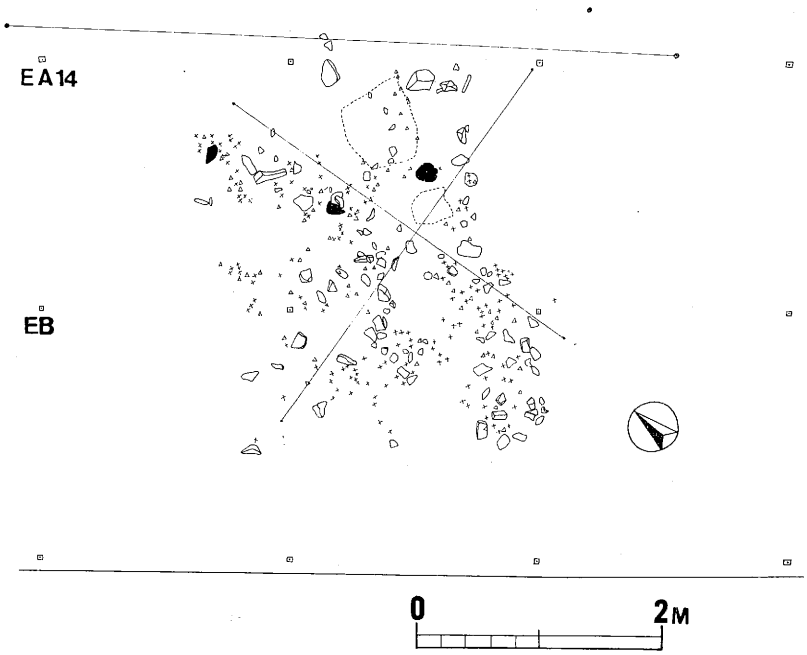
遺　物（第５表）（第28・29・30図）

甕（１）　最大径は口縁部にあり、長胴形である。頸部に一連の簾状文を描き、口縁部にやや細かに櫛描波状文を描き、胴部の中半まで施文するが乱れていて剝落や磨滅のため不明な点が多い、また火熱をうけたあとが下半部に限らず全面に見られる。

甕（２）　最大径が胴部にあり、ややずんぐり型の器形である。頸部の櫛描波状文は７



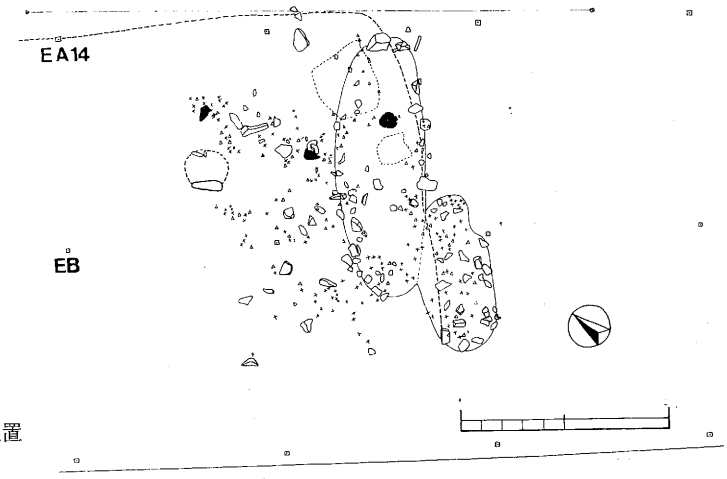
第19図　E－3～4グリッド下層遺物分布実測図



第20図　E地区集石墓状土壙土器集中地点実測図

第21図　E地区集石墓状土壙
掘り下げ実測図

第22図　E地区集石墓状土壙掘り
下げ完了実測図



第23図　E地区弥生住居地位置
関係平面図

条組で口縁端まで櫛描状文が描かれ、胴部の波状文は右まわりで乱れているが（１）よりは水平指向である。器面は摩滅が著しく内下半部は煤状付着物があり、外胴下半に籾痕が長径0.6cm、短径0.2cmで認められる。

甕（３）　胴上半部の破片でやや頸部が伸びている、口縁端まで櫛描波状を描き、頸部の簾状文は２連である。その２連間と波状文の始終がほぼ一致していると認められる。描き方は実に奔放で急に上に跳ね上がったり、重ねたりして乱れ、眼鏡状の個所もある。

小形甕（７）　口縁部の最大径を有し頸部に11條の櫛描平行文が見られ、上下に５条単位の櫛描波状文が描かれるが、摩滅が著しく火熱のあとが見られる。

小形甕（８）　胴上半部の破片で頸部に２連の簾状文をもち、口縁部の波状文は明瞭であるが、胴部以下は剝落し不明、台付の小形甕になるらしい。

壺（22）　大形の器形に属し、口縁は朝顔形に外反し、下腹部に稜をもって底部に至る器形で外面は胴部下まで内部は頸部まで赤彩されている。文様は頸部に細く浅く櫛描平行文、縦に２組、６条の櫛描文を４ヵ所描き、胴部上には簾状文を上下しながら描いているが細かく浅いため、摩滅している、またこの土器に限らないが胎土に鉄分粒が含まれており、製作地の同定に役立つのではないかと思われる。

壺（23・24）　胎土焼成、出土位置から同体と思われる土器で口縁部がつよく外反し頸部はやや短かく胴部は大きく張り下腹部に稜のある器形で胴部上に櫛描丁字文Ｃ（３）となっており、下半部は火熱をうけて煤状の附着がみられる。

鉢形土器（９）　ほぼ完形品で僅のカーブで外反し底部にはヘラ切の痕が残る、内外面は厚く赤彩され、供献用と思われる。

鉢形土器（10）　前者より大形でヘラ磨きのみの素文の土器で内部に煤状の付着する什器形態の土器である。

甑形土器（14）　底部よりほぼ直線的に外反した器形で底部の穿孔は焼成前になされており、口縁外辺に4.5条の擦痕が平行に残されており、煤状の付着物が底内部にある。なお甑形土器の小形の破片がもう一点ある。

高杯形土器（16）　脚部¼程の破片で赤彩され、三角窓のあるもの、(17)坏部が椀形の赤彩の高杯破片、(18)坏部底部に僅か平面を有する接合ホゾの顕著な赤彩の高杯破片、(19)口縁が水平近く外反し外面に稜のある赤彩された高杯片、(20)坏部断面がゆるやかなＳ字状を呈し椀形の赤彩された高杯、(21)坏部に稜なく外反し赤彩された高杯などがある。高杯形土器は復元できず破片ばかりであった。以上主なる集石墓出土の土器を見てきたが

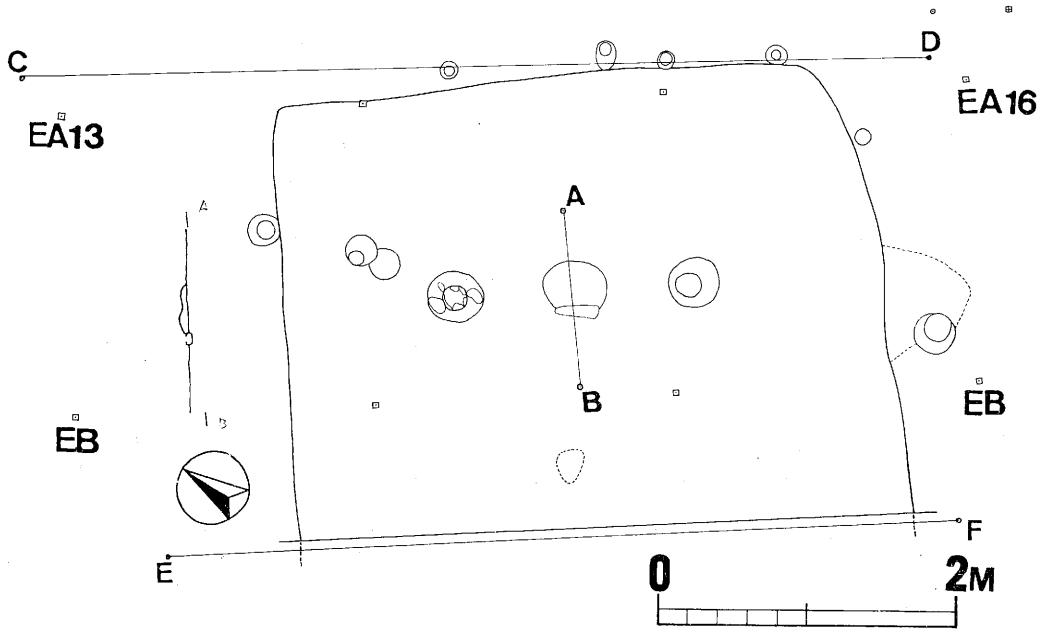
その他にも火熱をうけた土器片が多く見られ、小形土器の破片も見られた。

考　察

集石遺構が発見された時、集石上に圧砕か、或は破砕された土器片が多く、また赤彩されたものも顕著な状態だったので、祭祀、呪術、墓址的性格を有する遺構と想定して該当資料の検出に努めたが、埋納土器としての壺形土器が２個体以上、供献土器として赤彩された鉢形土器１個体以上、高杯形土器４個体以上と日常生活具としての煮沸形態の大小の甕形土器、鉢形土器、甑形土器の検出にとどまり、それに加えて小形の土器群があったが、その他の資料は木炭片の検出にとどまり（Ａ）（Ｂ）の配列状遺構の関係も究明する資料を欠いているが、集石遺構は弥生住居廃絶後、埋没か進行した時期に（或は故意に埋没）構築された廃屋墓的の要素を考慮して集石（墓）状の遺構としたのである。とぼしい管見の中から、県下の類例をあげてみると、下伊那の弥生中期の林里遺跡（４）の壺棺の隣の集石遺構例、後期の同じく下伊那の的場遺跡例（５）に座光寺原期の３住居址の集石遺構がある。同じ座光寺原期の権現堂前遺跡への２号・10号住居址は、本住居址例と住居址の（６）平面、炉の位置、地床炉に炉縁石１個の形態などが共通し、廃絶後の集石もされている。また家の前遺跡（７）４号住の集石遺構からは底部穿孔壺とガラス小玉が発見され、住居廃絶後再利用された廃屋墓と呼ばれるものは伊那谷では松川町で５、伊那市山の根遺跡で１発見例がある。（８）東信では佐久市蟻畑遺跡（９）自然石集構の中の石の間に人骨（30才位の女性頭蓋骨）と壺破片が発見され、壺は箱清水Ⅱ式で、土器の内外面に火熱をうけた痕跡とカルシューム残滓が附着しており土器と人骨が同一時点に逢着したのではないかと述べられ、再葬墓的な解釈もなされている。北信では埴科の屋地遺跡（10）に後期に属する集石遺構例があり、千曲川下流域では、栗林遺跡の集石址や土壙墓があり（17）、弥生後期では、飯山市須多の峯遺跡は県下初の方形周溝墓が発見され（12）たが、これは送葬儀礼の相違による墓制と理解したい。間山遺跡と相対する安源寺遺跡では（13）土器を破砕して土壙墓を覆う墓制をとっており、立地の相違を考慮すれば、庶民の墓制として共通点が認められる。以上、県下の類例を列挙してきたが、本集石遺構にも多くの共通点を見出すことが出来る。廃屋墓的性格があげられる。また壺の存在は佐久市蟻畑遺跡例と同型であり、火熱を受けている点が似ており、下伊那や、屋地遺跡例とも埋没住居址の形態がきわめて類似している点など注目される。また土器の出土状態も墓址的要素を含んでおり、北信の弥生後期遺跡の墓制の究明の資料として類例の増加を待って更に検討を加えてゆきたいと思われる。

弥生後期住居址（第24図）

遺　構　集石墓の調査が終り、敷礫を除去する作業中、黒褐色土が続く中に土器片が見られたので更に掘り下げたところ、住居址の南側の壁面が検出された。層序は県道側、西で表土（黄褐色土）は埋立土で90cm、（旧表土20cm）黒色土20cm、黄黒色混入土20cm、以下住居面は黄色土の地山となって礫が多量に含まれている。発見された土器は完形なものは無くややまとまった土器片は床面より10cm程うき上った状態で検出された。住居址のプランは用地の関係上完掘出来ず、やや不明確だが、南側の壁面は黄色土層に25cm程掘り込み、東側の壁面は、傾斜に従って逓減しており、北側は混合土層のため不明確であった。平面プランを復原してみると東西4.6m、南北3.9mの隅丸長方形が考えられる。主柱穴は２本検出されたが、４本が考えられ壁周囲に柱穴が見られたので未検出を含めて全面に存在すると思われる。東側の主柱穴の中間に径40×30cmの楕円形の地床炉があり、西側に長方形で平盤な炉縁石を置いていた。深さは12cm程で浅く、火熱で下の礫が３～４cmあり、脆くなっていた。床面は黄色土を敷いて硬く叩き締めた状態になっていた。住居址西よりと壁面外南側に焼土部分が見受けられた。この住居址は隅丸方形、主柱間に炉址を持つなど県下の弥生後期の通有の形態であるが、中野・飯山地方では掘り込みだけの地床炉が多いとされ



第24図　Ｅ地区弥生住居址実測図

ており、これらの弥生期の千曲川流域の炉について林幸彦、花岡弘の集成（13）が発表されたが、箱清水の炉については、中野・長野・東部佐久の全域にみられるとし、また、当地域と接する群馬県の樽式土器の分布圏には地床炉に炉縁石の有する例が圧到的に多いとされている。またこの炉縁石１個を伴う形式は的場遺跡例（15）など下伊那地方に多いとされ、北信では松代屋地遺跡例（16）の弥生後期10号住のコの字形炉縁石を伴うものと、同例のＹ９号住の炉縁石１個の炉が棟持柱の下にある類例などと合せて今後の検討資料となろう。

遺　物（第６表)(第31図)

壺口縁破片（１）床面より上層で検出されたもので塗彩はなくへら磨きされ、床面出土土器より後出的な要素がある。（２）は内部まで赤彩された壺下半部の破片で（３）は壺の底部破片と思われる。

甕（５）は口縁やや外反し折り返し状の口縁をもち頸部に２連の簾状文を７条単位２回描き櫛描波状文が口縁端部まで丁寧に細かく描かれているが、２次火焔をうけて器面剝落する。（６)(７)(８)(９）の甕の底部破片であろう。

高杯（10Ａ、Ｂ）は胎土焼成から同体と認定したもので杯部の口縁端部がつよく外反する。脚部は折損したものを使用し高台状になっているが、折損面は使いづれしている赤彩土器である。

高杯（11）は小形器台とも思われる小形供献土器で脚部に穿孔があり、脚内部までも赤彩されている。その他は小形塗彩壺の破片、刷毛目だけの折返し状口縁の小形壺破片、塗彩された口縁端部に櫛描波状文のある壺破片、ボタン状貼付文のある土器片や壺の口縁部外面にヘラの縦面使用によって描いた斜格子状文があり、下に櫛描平行文がある土器などで、塗彩土器片と他との比は１：１であり、器面の多くが剝離したものが多く見うけられた。

住居址と集石墓の土器

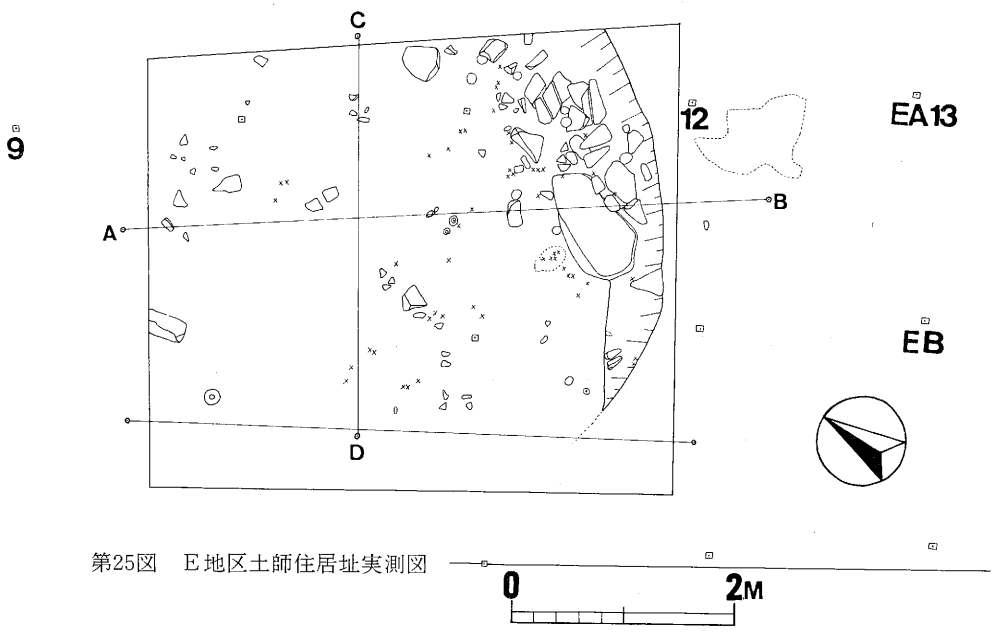
今回の調査で出土した箱清水土器は、まず安源寺遺跡出土（17）の土器に相似した点が多いことを指摘したい。それは沖積地の氾濫原を越して約５kmの地縁関係のしからしむる所以であろう。同じように更に下流の田草川尻遺跡（18）についても指摘される。安源寺遺跡出土土器について橋本裕行他（昭58)(19）から提示された特色のうち、まず群馬県の樽式土器の影響（20）の土器は今回の調査では抽出できなかったが、「くの字」状口縁として指摘された甕口縁部の形態の土器片はＤ地区から検出されている。口縁端を意識した櫛描波状文の装飾的な文様、甕形土器の口縁端から胴部中半まで、埋められた波状文、

折返し状口縁の甕形土器、土器製作地の問題と胎土の類似等々の近縁関係が挙げられる。（21）また赤彩土器の顔料の鉄丹には濃い赤色系とやや黒ずんだ赤色の２種類に大別される。前者の塗彩土器には鉢形土器（第28図９）や高杯（第30図）があり後者には壺（第29図22）高坏（第29図20）がある。所属時期、器種及び形態、製作地などの問題は今後の検討に残されている。前記２遺跡の発掘調査の業績や箱清水式土器の現状の先学諸氏の業績から援用して考察すると、住居址出土の土器群は、完形品を欠いて不明な点もあるが、塗彩土器の盛行、甕形土器の形態と文様などから後期中葉とされよう。また集石墓出土の土器は混入の点が懸念されるが、壺形土器の下半部の稜の存在や、甕形土器の長胴形で施文に乱れが多い点や、高杯形土器の口縁部の形態などから、後期後葉の前半の時期に比定したいと考えている。

平安時代

土師住居址

遺構（第25・26図）国分期の住居址がＥ９～12地点で検出された。まず最初、石組竈の遺構が検出され、住居址の所在が確定した。この住居址も調査区の関係で西側部分は未発掘となった。図上復原してみると南北4.5m、東西４ｍの隅丸方形に近いプランが想定される。傾斜の上方南側を20～30cm掘り下げて床面を造成しているが、床面は特に叩打された



第25図　Ｅ地区土師住居址実測図

形跡は認められなかった。柱穴は該期の県下例の如く検出されなかった。東南隅に石組竈があり、幅、奥行が30cm、高さは20cmを測る。竈内には、脚高高台付杯をはじめ、坏4個が転落していた。その東側より甕破片1個分が検出され、竈をめぐる住居内より8個の杯が、散って存在した。竈の西方に接して長径1m短径50cm程の上端やや平の石が据られ、その他にも土留めの石と思われるものが存在した。前記の石は工作台石と考えられた。この石の上方1m附近の住居外に1m²程の焼土部分が検出された。暗文のある碗形土器は南壁面の中央やや西寄りに発見され、前記以外の杯碗片は住居内に点々と散在していた。住居中央北より検出された胴上半部の小形壺破片は輪積痕を残し五領期の所産と考えられるので、当地への混入と考える。また敲打石は据石の前面30cmの床面より検出された。

遺　物（第7表）

甕形土器は2個体分あり、（第32図1・2）口縁部がくの字に外反する国分期通有の形状のものである。下半部は欠落する。坏形土器は復元できたもの10個で内黒土器は3個あり。全部ロクロ整形、糸切底である。小形の杯には内部中心部が盛り上りを見せるものがある。（4・5・14）高台付坏は2個（13・14）で底部糸切後、高台部を付着させている、高台付碗形土器としたものは4個あり、（15・16・17・18）中にはほんの僅かの高台のものもある。内黒のものは2個で18は放射状の暗文があり、一部分に木目状の押捺の痕があり（19）製作時の型台か乾燥時の台木の痕と考えられる。高台部内側が乳首状にヘラ切された足高高台付坏（22）が1個検出された、坏部は浅く盤状を呈するものである。敲打器は安山岩の円礫で両端に打裂痕があり、側面にも凹部がある、住居内の据石と関連した遺物と考えられる。また復元されない坏片は5・6個体分ある。

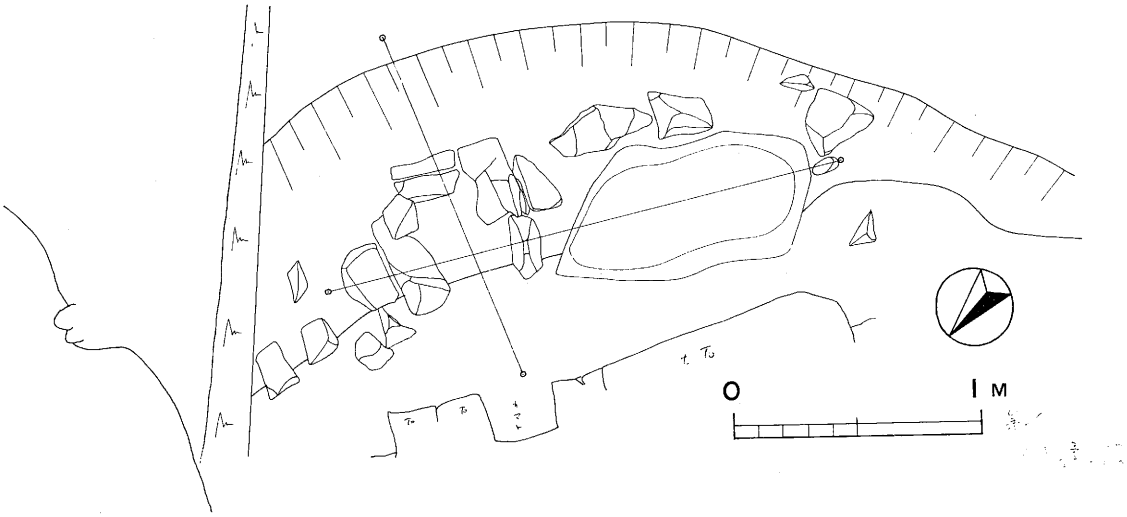
考　察

本住居址出土の遺物としては暗文土器と足高高台付杯の検出が注目される。特に後者は中野市では初見の資料である。かつて川上元氏が、森嶋、笹沢両氏の先学の業績の上にたって、「土師系什器の展開と終焉」の論文を発表され、善光寺平の土師器の編年を5様式に分類し、第5様式（国分期）を更に5期に分類し、足高高台付杯の消長を論ぜられ、その資料を七遺跡より例示されたが、本住居址一括出土品と類似する資料は、長野市松代町松原西遺跡出土品（23）で暗文の杯が存在、足高高台付杯の高台先端部の形状など相似している。これらは前掲論対によれば、善光寺平第5様式の第Ⅴ期に当り、12世紀後葉に編

年され、この足高高台杯の消滅をもって中世の木製什器との転換期とされたのである。そしてこれらの時期は間山の歴史から言うと三次にわたって発掘調査された建応寺の創建の時代と重なると想定される。(24)

その他の出土品（第30図）

11～12グリッドの出土品は五領期と思われる壺破片、穿孔のある壺口縁部破片などがあり、胎土を見ると鉄分粒が細かいけれど含有し土器製作の素材が、条件を同じくして弥生時代から継続して行われた事を物語っている。（１）の高杯は昭和56年の基盤整備事業施行の時、間山区の丸山橋東方地点で矢野修自氏が発見され、今回の調査で復元したもので、中野市歴史民俗資料館に寄贈された。高さ23.5cm、口縁部径22.7cmの優品で脚内部を除いて赤色塗彩が厚く施され、簾状文が１筋坏部に施されている。脚内部には刷毛目状工具の擦痕が残っている。箱清水式中葉の所産と考えられる。（２）の台付小形甕形土器は間山豊富神社東方の望月晃氏の宅地から昭和40年出土したもので台部の広い安定した器形で胴部最大幅部より口縁上端まで櫛描波状文を施文しこれも所産は箱清水式中葉が考えられる。（３）の甕は昭和53年頃、間山区の望月澄雄氏が字十二、464番地、Ｅ弥生住居址の上方約30cmの畑のりんごの植穴より、発見されたもので折返し状口縁の３条の櫛描波状文があり、頸部の簾状文は、８条である、胴部上まで乱れた波状文を施文されており外面は煤が付着し、胎土焼成が良好である。今回の発掘土器の検証によれば折返し状口縁をもつ甕形土器の胎土焼成が、全般的に良好な点が指摘できる。



第26図　Ｅ地区土師住居址カマド附近平面実測図

引用文献

（１）佐藤甦信　下伊那地方における土師器に伴う打石器について　長野県考古学会誌第５号　昭42

（２）神村透他　シンポジウム「弥生文化の東漸とその発展」　長野県考古学会誌第５号　昭43

（３）笹沢浩　箱清水土器発生に関する－式論信濃Ⅲ22－11　昭45

（４）神村透　林里遺跡　長野県史考古学資料編　主要道路　南信　昭58

（５）佐藤甦信　的場遺跡　同上

（６）宮沢恒之　弥生住居址の分析　－集落問題についての資料研究－　信濃Ⅲ25－12　昭48

（７）（６）と同じ

（８）（６）と同じ

（９）竹内恒　人骨の特殊な出土状態を示す長野県佐久市　蟻畑遺跡　信濃Ⅲ21－４　昭44

（10）大川清他　長野市松代　屋地遺跡　昭52

（11）金井汲次　栗林遺跡　長野県考古資料編主要遺跡　東北信　昭57

（12）高橋桂　須多峯遺跡　同上

（13）金井汲次　安源寺遺跡　同上

（14）林幸彦　花岡弘　弥生時代の炉　－千曲川流域を中心として－　信濃Ⅲ35－４　昭58

（15）（５）と同じ

（16）（10）と同じ

（17）Ⅰ金井汲次他　中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告書　第２次　中野市教委　昭42

Ⅱ金井汲次　安源寺第三次発掘調査報告書　中野市教委　昭54

Ⅲ橋本裕行他　信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(一）信濃Ⅲ35－４　昭58

（18）太田文雄　北信濃の弥生式後期編年について　－田草川尻遺跡出土土器を中心として－
信濃Ⅲ32－４　昭55

（19）（17）Ⅲと同じ

（20）（17）Ⅱ（17）Ⅲと同じ

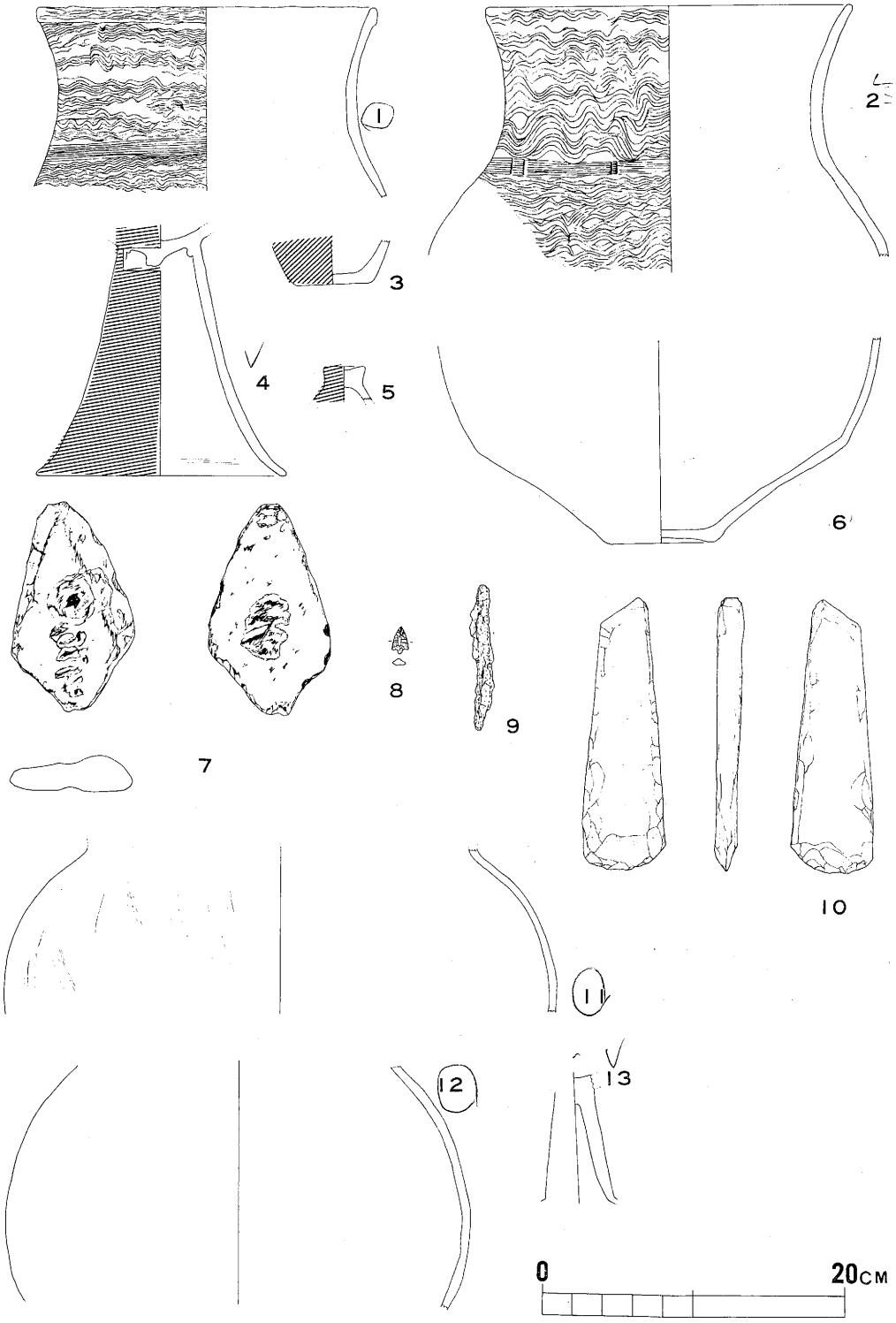
（21）この地域で器物を造形する粘土は高丘丘陵から運んで使用する。従って間山遺跡の土器は安源寺遺跡方面から運ばれたか、粘土を運んで作られたと考えられる。

（22）川上元　土師系什器の展開と終焉　中部高地の考古学Ⅰ　昭53

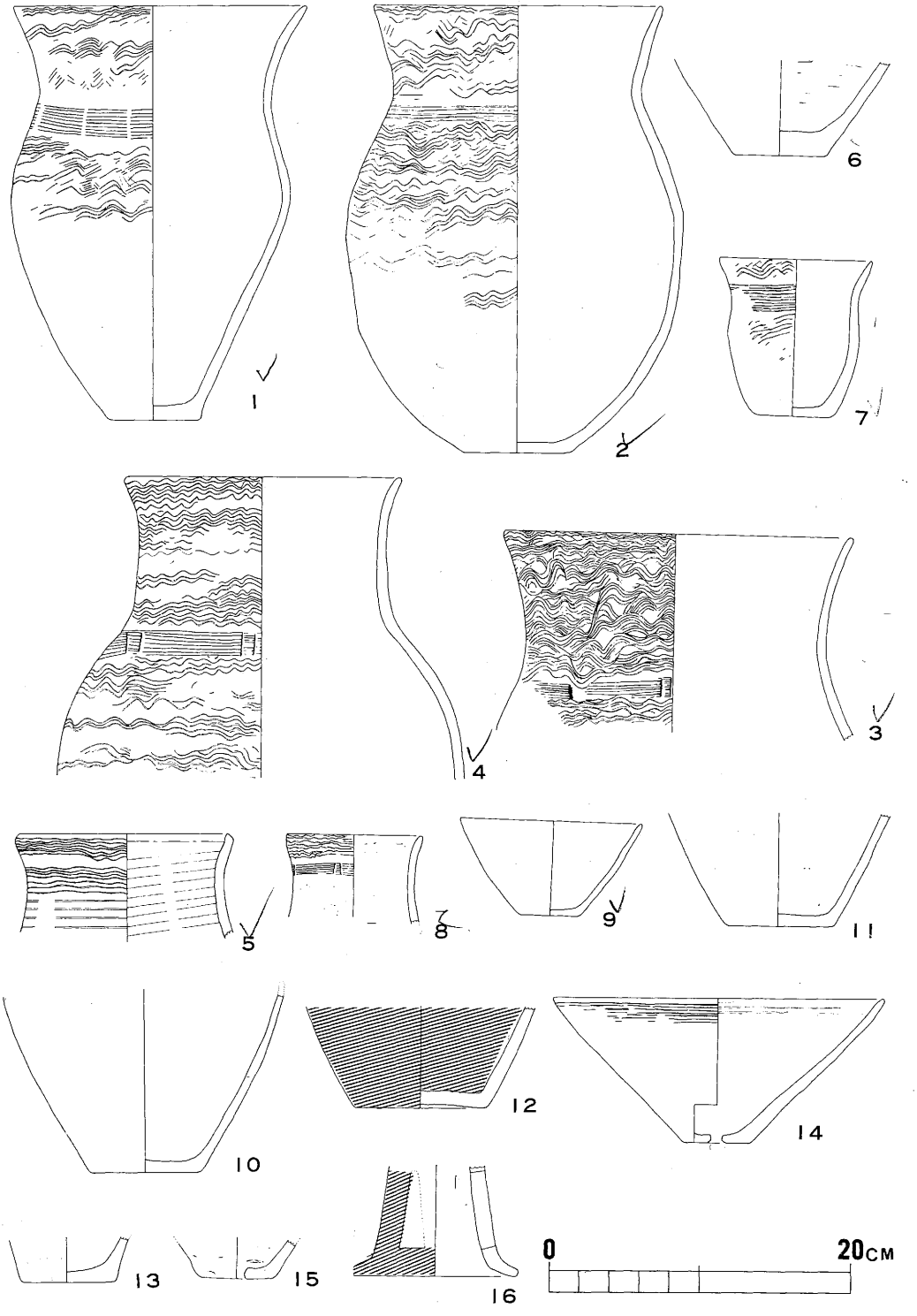
（23）森嶋稔　更埴地方誌　原始古代中世編　昭53

（24）　中野市教委　建応寺跡の調査　高井62号　昭57

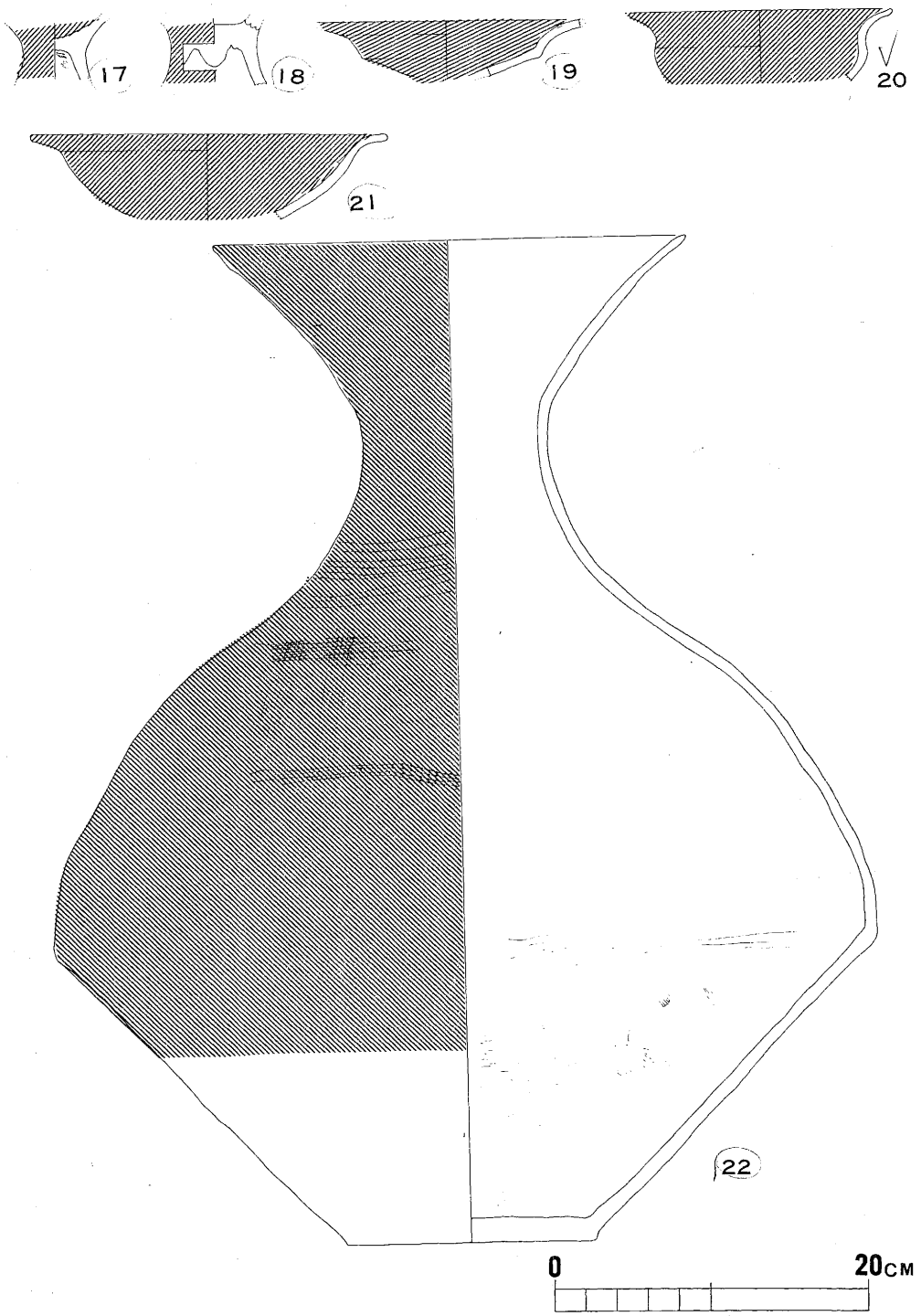
（檀原長則）



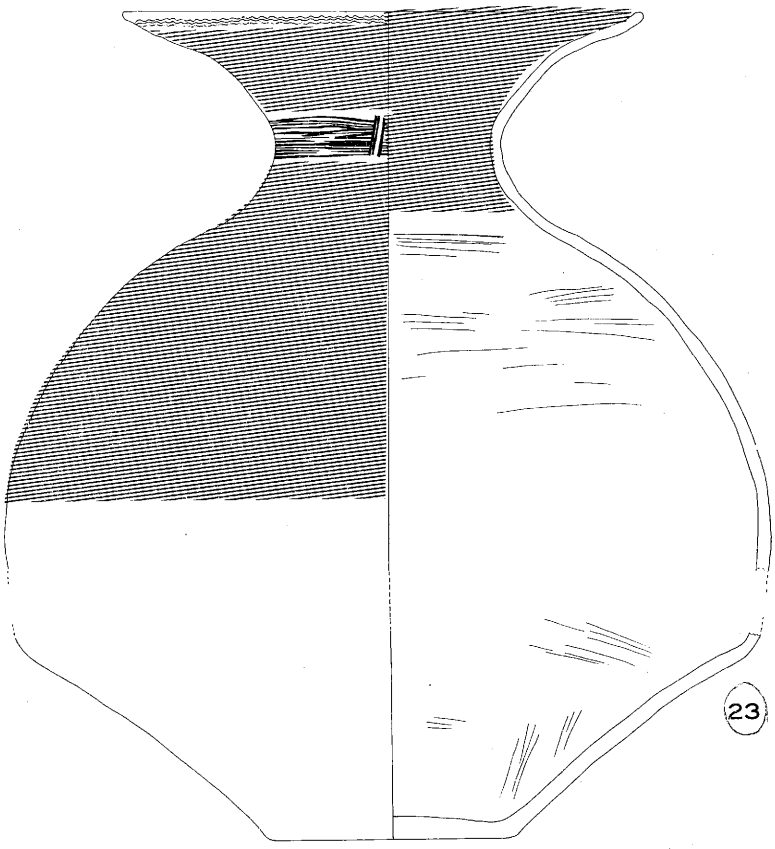
第27図　E地区3～4グリッド出土遺物実測図



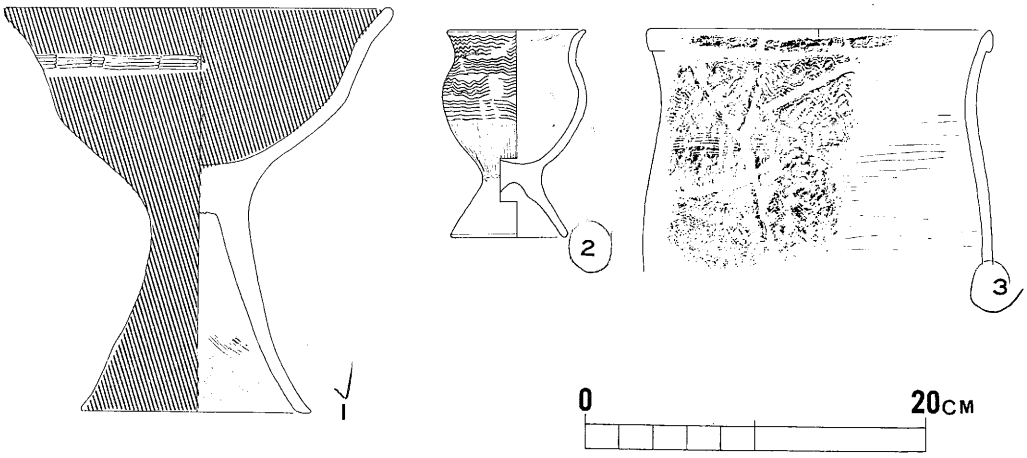
第28図　E地区集石墓状土壙出土遺物実測図



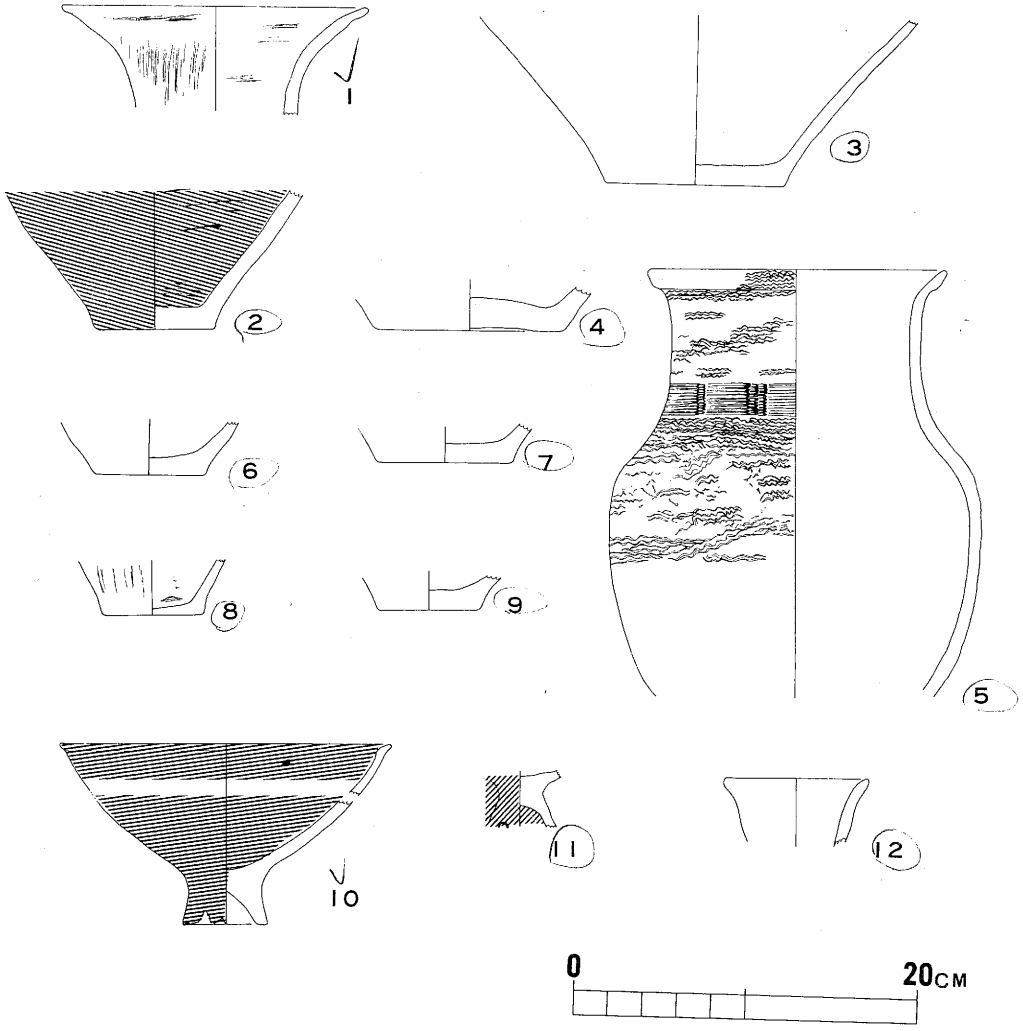
第29図　E地区集石墓状土壙出土遺物実測図



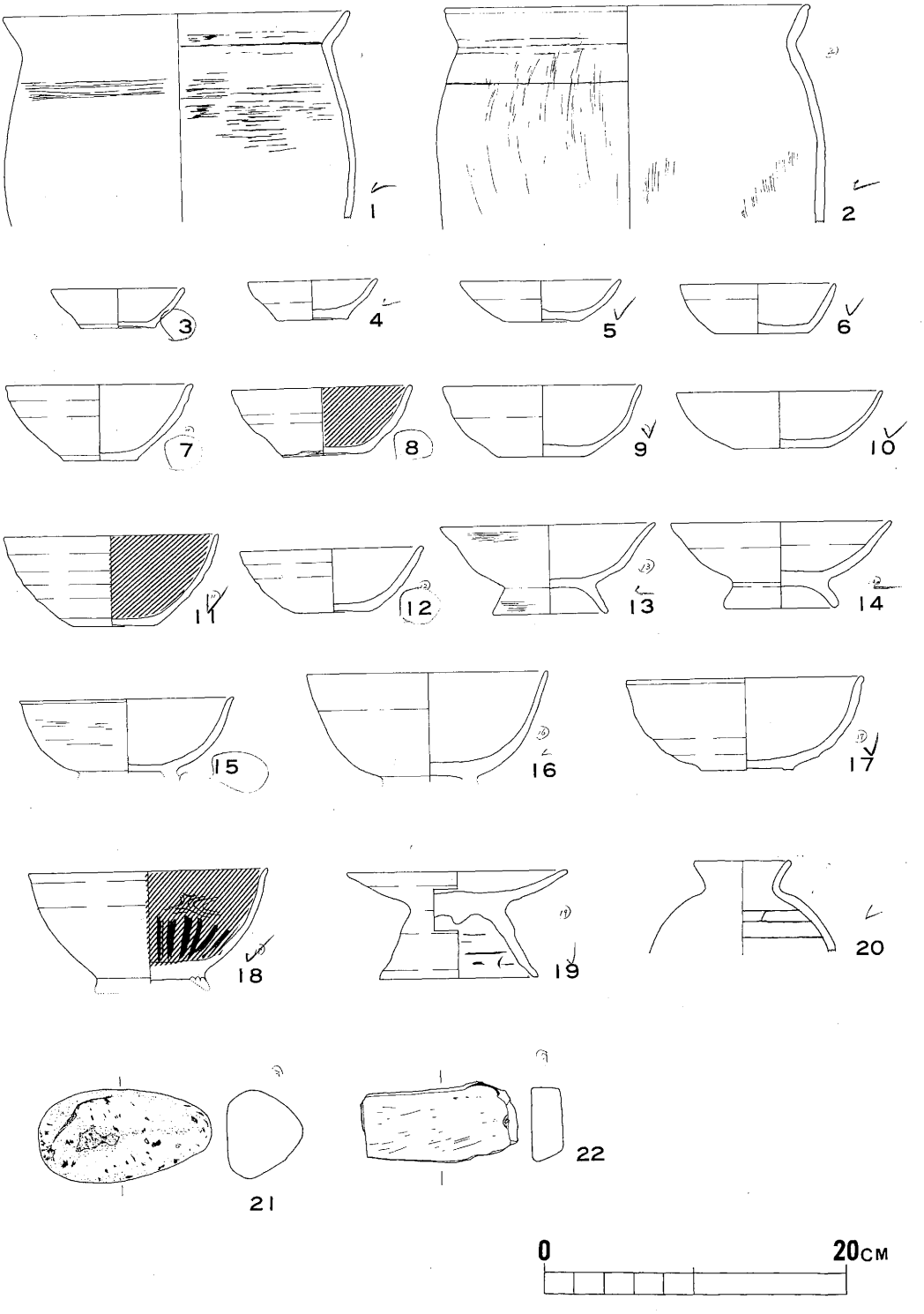
第30図　E地区集石墓状土壙出土遺物実測図



参考遺物実測図



第31図　E地区弥生住居址出土遺物実測図



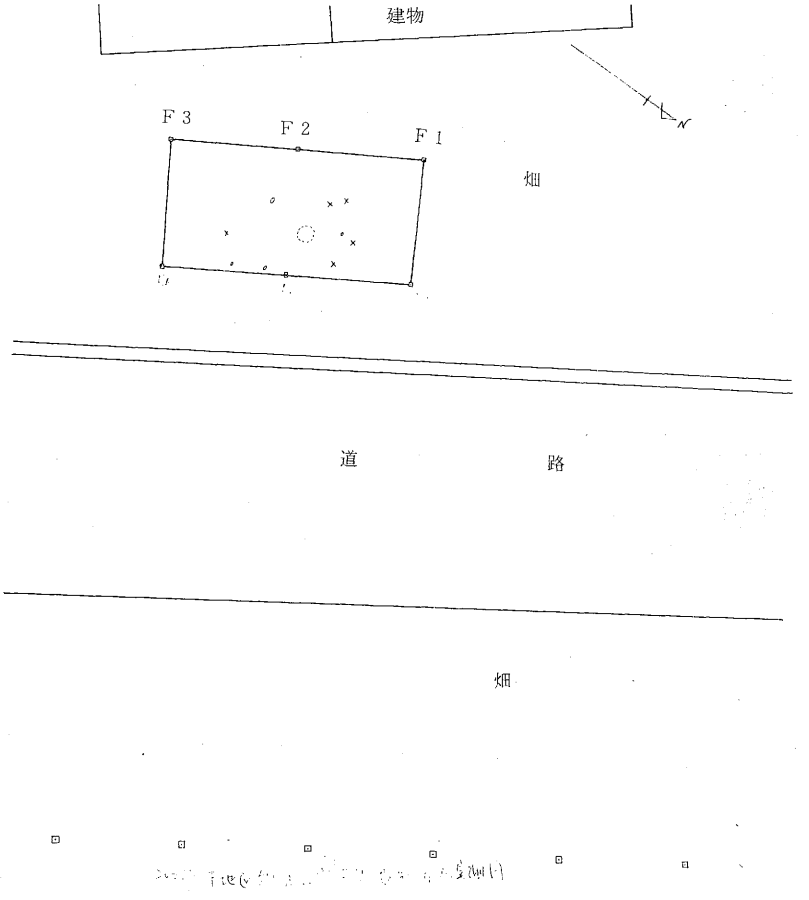
第37図　E地区土師住居址出土遺物実測図

6　F地区

間山字森下237－７、矢野武明氏の宅地の一部である。県道沿の西側に面している所で、道路より若干高く、北面に向ってゆるい傾斜地である。発掘面積は約8㎡である。（第１図）

発掘地Ｅの土層は、三層から成る。第一層は表土の耕作土で、約20cm内外である。地区西側中央部に、径18cm内外の木株があり、第二層へ食込み、影響を与えている。耕作土のため礫は少なく、遺物はごく少量の土器片のみである。

第二層は16cm内外の層で、第一層に平行して、北と東の両面へ若干の傾斜をしている。第一層より若干黒褐色で、小礫が混入している。遺物はこの層の下層から、第三層にかけて多く出土した。



第33図　下地区グリッド設定及び遺物分布図

第三層は第二層より硬いが、黒褐色である。出土遺物の主体はこの層からである。しかし完形品は磨製石斧（第34図▲印）１点のみでほかは土器の破片である。遺構らしきものは検出されなかったが、自然の河原石が数個存在した。（第34図Ｓ印）

遺物として検出されたのは、土器が主体である。しかし完形の土器は１点もなかった。完形品はわずかに、磨製石斧と、隣接地区からの土製紡錘車の各１点だけであった。

出土した遺物の概要は、次のようである。磨製石斧・縄文土器片・紡錘車・土師器片の各１点のほかは、弥生式土器片210点である。

このうち特に弥生式土器は、胎土の不良のものが多く、焼成後土器の表面が摩消しているものが多い。したがって文様のみられるのは32片であるが、不鮮明なものが多い。

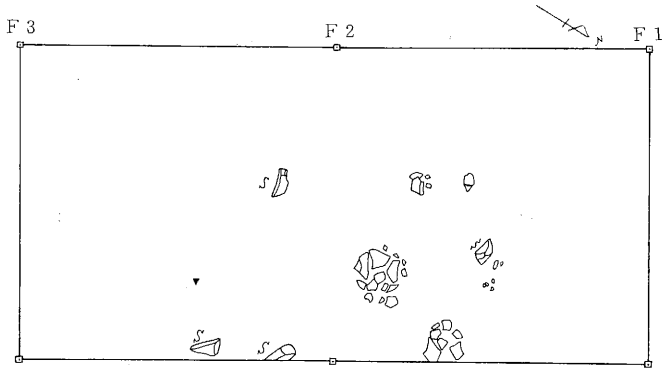
土器の破片は、口縁部３点、底部４点のほかは、器形の部位の不明なのが多い。また赤色塗彩の明らかなのは13片である。

出土遺物の特色について、以下示す。（第35図）

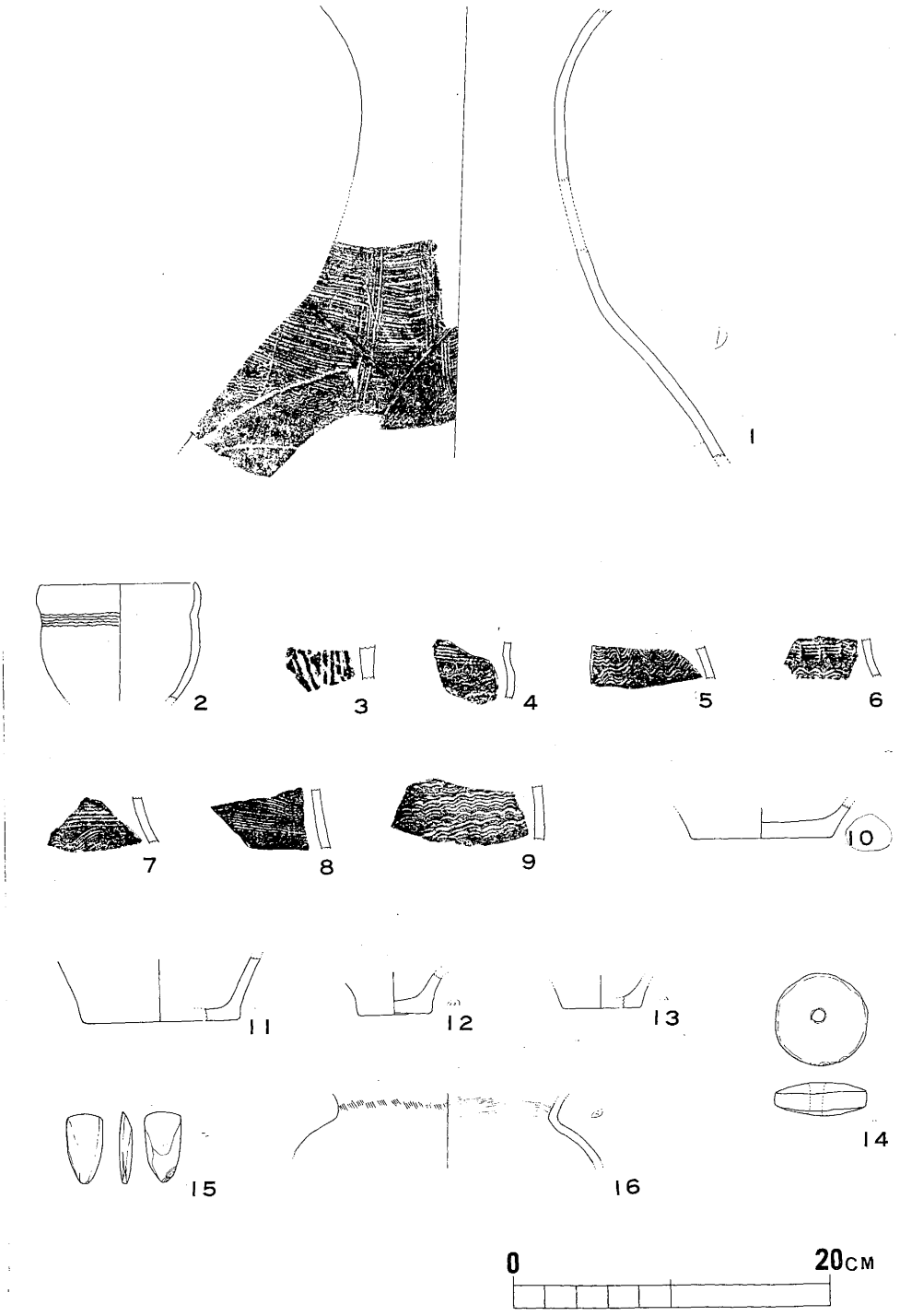
縄文土器（３）　半裁竹管文が深く刻まれている。胎土焼成もよいが、小破片である。中期後葉か。

磨製石斧（15）　長さ5.5cm、最大巾2.4cm、最大厚0.7cmの小形石斧である。全体がよく磨かれており、黒色の光沢がある。ただ頭部の一部の凹所は磨かれていない。また刃部は使用痕が認められ、こまかな鋸刃状が認められる。この石斧の全体の形や刃部が、鉋形石斧に類似しているが、縄文時代のものと見るべきである。

弥生式土器（１）　朝顔形の口縁の大きな壺形土器であるが、頸部から肩部にかけてのものである。胎土はあまり良くないが、文様は頸部に櫛描簾状文があり、肩部に櫛描波状



第34図　下地区遺物分布実測図



第35図　下地区出土遺物実測図

文が見られる。

弥生式土器（２）　底部を欠いているが、器形は鉢形に近く小形である。台付かどうかも不明である。これも胎土があまりよくなく、頸部の櫛状波状文も、部分的には消滅している。やや黒褐色を呈し、全体がかわいい感じのする土器である。

弥生式土器小破片（４～９）　櫛描の波状文や簾状文をもち、頸部から胴部にかけてのものである。32片の文様のうちから、比較的鮮明なものをかかげた。

弥生式土器底部（10～13）　10・11は、かなり大きいが、胎土が荒く表面はざらざらしている。それに比べ12・13は、小形であるが、胎土焼成はよく、外部は黒褐色を呈す。10・12は壺形、11・13は甕形か。

土製紡錘車（14）　Ｆ地区外の隣接する字森下235－４の、矢野修自氏の工場敷地より出土した。氏の語るところによると、昭和47年５月中旬、工場建設のため地ならしをした。その際土器片にまじり、この紡錘車が出土したという。したがって出土層は不明である。これは直径5.7cm、厚さ21cm、中央の孔の径0.9cm、重量は70ｇである。胎土焼成がよく、がっちりしている。使用痕が認められ、円周部や中央の孔附近は、部分的にすりへったり、欠けたりしている。安源寺遺跡第３次発掘品(注)の５例と比較してみると、直径はほぼ平均的であるが、厚みがあり、重量もかなりある。発見地点や、遺物の類例からして、弥生時代の遺物である。

以上の弥生式土器は、文様、器形等から後期の箱清水式に相当する。市内では三次にわたる発掘をみた、安源寺遺跡(注２)に好例がある。

土師器（16）　頸部から肩部にかけての破片である。胎土焼成も良く、黒褐色を呈す。文様は頸部の内外に櫛状の浅い刻みがあるが、文様としてはやや粗雑な感じである。和泉Ⅱに相当するものか。

以上Ｆ地区について述べたが、特に本格的な遺構は見当らなかった。遺物では弥生後期の箱清水に相当する遺物が主体であった。しかし遺物の土器は粗製品でしかも小破片が多かった。したがって遺跡の中核的な地区とは成り得ない。

（田川幸生）

註１　中野市教育委員会「安源寺遺跡第三次発掘調査報告書」土製紡錘車　14Ｐ

註２　中野市誌編纂委員会「中野市誌歴史編（前編）」安源遺跡の発展　59Ｐ～

第5章　む　す　び

間山地区には原始・古代・中世にわたる間山遺跡があって、往古から出土品の多いことで知られている。学術的発掘調査は、昭和33年に神田五六氏が「間山石動下遺跡」の調査を担当され、「建応寺跡」は昭和53・54・57年の3回にわたって筆者が担当して調査し、4回の調査については、いずれも報告書が刊行されている。

今回の調査は十二川沿えの県道拡幅工事施行前の緊急発掘調査で、川沿えの狭長な地帯であり、地形的にみても遺構・遺物は稀薄であろうと予想されていた。しかし、調査結果は既述のごとき予想外の成果をあげた。成果を集約したものは次表のとおりである。

区分		出土物		特色	出土地区	摘要
編年		遺構	遺物			
原始時代	縄文前期	住居址1	土器片(関山式－多)、磨石斧1、打石斧1、石鏃(有柄)1、石鏃(無柄)1、凹石2	繊維混入 羽状縄文	C D E	既出(土器片・石器)
	弥生後期	住居址1 集石址2	土器(箱清水式－高坏・壺・甕・鉢・甑・蓋)打石斧1	赤色塗彩 波状文 籾痕	E D F	既出(合口甕棺・太形蛤刃石斧・磨石鏃)
古代	古墳	集石址2	土器片(五領式－少)	複合口縁 S字口縁	D E	
	奈良	住居址1	土器片(真間式－坏・高台付坏・高坏・壺甕)	手づくね	A C	既出(銅鏃)
	平安	住居址1	土器(国分式－坏・高台付坏・足高高台付坏)、灰釉片、須恵片、刀子1、鉄器片1	糸切底、内黒、石組竈	C F	間山石動下遺跡(昭33年発掘) 建応寺跡 日野郷(和名抄)
中世	室町		古銭(聖宋元宝)1、石臼片2、砥石片2、内耳土器片(多)	石臼6分角	A	小曽崖城跡(古銭・青磁・白磁)

旧盆あけを待っての発掘調査は、残暑きびしい日々が続き、作業は難渋をきわめたが、調査団員をはじめ、作業に協力くださった努力によって、上述の成果をあげることができた。関係者各位に心からお礼を申しあげる次第である。

(金井汲次)

第２表　Ｃ地区出土土器（第11・12図）

番号	器形	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外	色調 内	備考
1	甕	－	24	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形 ヘラ磨き	小　砂	良	赤褐色	茶褐色	土師　Ｃ－６－８接合
2	甕	－	－	－	残存部　全体に凸凹有り	ヘラ磨き、左上より右下に13条の線刻	小砂石	粗悪	黒褐色	薄茶色	土師すすけたあと有り 胴部
3	甕	－	24	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形、ヘラ磨き 外面凸凹あり	小　砂	良	茶褐色	薄茶色	土師　住Na４、CA６・７と接合
4	甕	－	20	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形	小　砂	良	茶褐色	茶褐色	土師カマド東 石英雲母含む
5	甕	－	26	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形	小　砂	良	薄茶色	焦茶色	土師　Na９
6	甕	－	27.8	－	残存部　口縁部外側まるみ有り	ロクロ整形	小　砂	良	薄茶色	茶褐色	土師　Ｊアト
7	甕	－	28.5	－	残存部　外縁部外開	ロクロ整形	小　砂	良	茶褐色	茶褐色	土師　(焦)Na７
8	高台付坏	－	－	7.7	残存部　椀　形	ロクロ整形	小　砂	粗悪	茶褐色	中　黒	土師　住Na２
9	手づくね土器	2.3	4.8	4.6	残存部　口縁部高底有り 底部湾曲している	手	小　砂	粗悪	茶褐色	茶褐色	土師　CA－６
10	壺	－	2.5	－	残存部　無頸壺	ロクロ整形	小　砂	良	青灰色	灰　色	CB－２
11	甕	－	－	5.5	残存部	ロクロ整形	小　砂 鉄分粒	良	茶褐色	茶褐色	土師　CA－20
12	甕	－	－	6	残存部　糸切底		小　砂	良	灰　色	灰　色	
13	壺	－	24.5	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形 ヘラ横磨き	小砂石	粗悪	茶褐色	青褐色	Ｃ－24
14	甕	－	12.2	－	残存部　口縁部外開	ロクロ整形 ヘラ磨き	小　砂	良	茶白色	茶白色	Ｃ－24
15	壺	－	12	－	残存部　胴部、最大径をもつ	ロクロ整形	小砂石	粗	赤褐色	黄茶褐色	Ｃ－24
16	壺	－	－	5	残存部　弥生に近い土師	ヘラ磨き	小　砂 鉄分粒	良	薄茶色	薄茶色	Ｃ－
17	皿	1.6	13.5	7.5	舟　形 糸切底	ロクロ整形 ヘラ磨き	小　砂	良	茶褐色	黒	土師　Ｃ－24
18	坏	5	12	5	椀　形	ロクロ整形 ヘラ磨き	小　砂	良	茶褐色	中　黒	土師　Ｃ－24
19	高台付坏	－	9.9	－	残存部　丸底 皿形	ロクロ整形 糸切底（坏部）	小砂粒	良	茶褐色	茶褐色	土師　Ｃ－24
20	甕	－	14.5	－	外　開	ロクロ整形 ヘラ＋磨き	小　砂	良	茶褐色	茶褐色	土師　矢野修自工場ヨコ Ｃ地区
21	坏	5.1	15.2	7.4	椀　形	ロクロ整形 ヘラ磨き	小砂粒	良	赤褐色	黒	土師　Ｃ－24カマド
22	高台付坏	4.1	13.2	－	椀形口縁外反	ロクロ整形	小　砂	良	青褐色	黒	土師　Ｃ－24カマド
23	高　坏	－	－	－	残存部　皿部椀形	ヘラ磨き	小　砂	良	茶褐色	茶褐色	土師　Ｃ－24
24	高台付坏	7.7	16	7.7	椀形口縁外反	ロクロ整形	小　砂	良	灰　色	灰　色	灰　Ｃ－24 矢野修自工場ヨ 釉　コ残存部３分の１以下
25	甕	－	31.8	－	残存部　口縁外反	ロクロ整形	砂粒混入	良	青灰色	灰　色	須恵　Ｃ－24
26	甕	－	－	－	残存部　胴部開	交差タタキ目	小　砂	粗	灰　色	灰褐色	須恵　Ｃ－24
27	甕	－	－	－	残存部　頸　部	平行タタキ目	小　砂	良	灰　色	灰　色	須恵　Ｃ－24

第３表　Ｄ地区出土土器（第17図）

番号	器形	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外	色調 内	備考
1	壺	推定 46			本文中参照	外面　ヘラ磨きの後塗彩 内面　ハケ目調整	２～３㎜の砂粒を含む 雲母を含む	やや堅い	黄茶色	橙茶色	Ｄ－20出土 胴部$\frac{1}{2}$程度及び口縁部欠損
2	甕		14.5		〃	外面　縦方向のハケ目調整 内面　横方向のヘラ削り	所々に酸化粒が含まれる２～５㎜程度の砂粒を含む	やや もろい	黒茶褐色	茶褐色	$\frac{3}{4}$～$\frac{2}{3}$残存 煤が頸部より下方に付着している Ｄ－12出土
3	〃		推定 14		〃	外面　横方向のハケ目調整 内面　〃 文様は下から上に向って施文	雲母を多量に含む	堅い	〃	〃	$\frac{1}{4}$残存 Ｄ－17～18出土
4	〃		推定 16		〃	外面　頸部に整形時の指頭圧痕有り 内面　頸部を境として上面は横ナデ整、下面は横方向のヘラ削り	５㎜程度の小石が希に含まれる。 所々に酸化粒を含む	堅い	黒黄茶色	橙褐色	Ｄ－18～19出土
5	小形甕			3	〃	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り	１㎜程度の細石粒を含む	粗雑であるが堅い	黒灰色	黒灰色	Ｄ－20出土
6	高坏				〃	外面　縦方向のヘラ磨きの後、赤色塗彩 内面　上方ヘラ削り 下方ヘラ磨き	１㎜程度の細石粒を極少量含む	堅い	丹彩	茶色	Ｄ－17出土
7	〃				〃	外面　接続部横方向ヘラ削り、脚部不規則なハケ目調整 内面　ヘラ削りの後粗雑なハケ目調整	３㎜程度の石粒を多量に含む 雲母を含む	やや堅い	一部丹彩 淡白茶色	黒茶色	Ｄ－18出土
8	〃				〃	外面　接続部横方向のヘラ磨き 内面　ヘラ削り	雲母を含む ３㎜程度の細石粒、極少量含む	〃	〃	淡茶色	Ｄ－20出土
9	〃？				〃	外面　ヘラ磨き 内面　ハケ目調整	雲母を含む 酸化粒を含む	やや もろい	茶色	橙褐色	Ｄ－20出土
10	甑			5	〃	外面　ヘラ削り 内面　〃	酸化粒を含む ４㎜程度の石粒を含む	〃	茶白色	淡茶色	Ｄ－23出土
11	紡錘車	厚さ 推定 1	外径 6.5	孔径 6	〃	ナデ整形 整形時指頭圧痕あり	１㎜程度の砂粒を含む	堅い	茶褐色		Ｄ－20出土
12	器台	7.5	9	8	〃	手づくねにより成形 ナデとヘラによって整形	５㎜程度の石粒を含む 雲母を含む	もろい	黄茶色		Ｄ－20出土
13	甕		13		〃	外面　全面をハケ目調整した後、口縁下外を横ナデ、口唇部をヘラ削りによって平坦面を作っている 内面　ハケ目調整	黒雲母を含む 0.5㎜程度の砂粒を含む	やや もろい	淡赤茶色	黒褐色	Ｄ－18～19出土
14	〃		15		〃	外面　口縁横ナデ 胴部ハケ目調整 内面　胴部ヘラ磨き	１㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	赤茶色	〃	Ｄ－18出土
15	〃		15		〃	外面　縦方向のハケ目調整の後、口縁部のみ横ナデ 内面　横ナデ	１㎜～２㎜程病の砂粒を多量に含む	〃	橙茶色	茶褐色	Ｄ－20出土
16	〃		12.5		〃	外面　全体をハケ目調整の後、口縁部のみ横ナデ 内面　様方向のハケ目調整の後、横ナデ	雲母を含む １㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	赤茶色	薄黄茶色	Ｄ－18出土

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
17	壺		14		本文中参照	全面にハケ目調整 口縁下段内面に1段のクシ目有り	酸化粒を小量含む	やや堅い	赤茶色	薄赤茶色	D－18出土 胴部と口縁接合部内外面に整形時の指頭圧痕有り
18	〃		14		〃	全面にハケ目調整	〃	〃	〃	赤茶色	〃 D－18出土
19	〃		15.5		〃	〃	〃	堅い	暗茶褐色	暗茶褐色	胴部と口縁部との接合部において欠損 D－18
20	〃				〃	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削りの後ハケ目調整	雲母を含む 2～3mm程度石粒を含む	〃	〃	赤茶褐色	D－18出土
21	高坏	坏部4	20		〃	外面　ハケ目調整 一部ヘラ削り 内面　ヘラ磨き	〃 石英、雲母を含む	やや堅い	橙茶色	橙茶色	D－18出土 坏部のみ
22	〃				〃	外面　ヘラ磨き 内面　〃	1mm程度の砂粒を含む	ややもろい	薄橙茶色	暗橙茶色	
23	〃				〃	外面　磨滅のため不明 内面　スソ部との接合部上方はヘラ削り、下方はハケ目調整	2mm程度の石粒を含む 石英、雲母を含む	〃	黄茶色	赤茶色	D－18出土
24	〃	脚部7		4.5	〃	外面　ヘラ磨き 底部内ヘラ削り後、ナデ	石英を含む	堅い	橙褐色	橙茶色	D－7出土
25	〃				〃	全面　ハケ目調整	雲母、石英、長石等、砂粒を多量に含む	やや堅い	赤茶色	黄茶色	D－18出土
26	〃				〃	ヘラ磨き ハケ目調整	石英、雲母を含む	〃	薄茶褐色	薄黒褐色	D－20出土
27	坩形土器	7.0	13	2	〃	外面　ハケ目調整の後、口縁部横ナデ 内面　胴部ヘラ磨き 口縁部横ナデ	2～3mm程度の砂粒を含む	ややもろい	薄赤茶色	赤色塗彩	D－18出土
28	〃		13		〃	外面　ハケ目調整 内面　口縁端部横ナデ、ハケ目調整	砂質に富む 雲母を含む	〃	黄茶色	黄茶色	D－18出土
29	〃		9.6		〃	外面　ハケ目調整 内面　〃	雲母を含む	〃	暗黄茶色	暗黄茶色	D－18出土

第4表　E－3・4　地区出土遺物（第27図）

弥　生

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
1	甕		22.3		折返し口縁 最大径胴部	口縁上まで施文 施文乱れる、平行文	鉄分粒 石英粒	堅	黒褐色	赤褐色	外面　煤状付着
2	〃		24		胴部最大径	波状文合致せず、メガネ状を呈す	鉄分粒	堅	灰褐色	灰褐色	頸部上残存
3	小形壺			5		内面　不整形 外面　赤色塗彩	小砂	堅	赤褐色	〃	底部残存
4	高坏			16.4	脚部器厚薄手	ホゾ接合、内刷毛目整形外ヘラ整形 塗彩	鉄分粒 小砂	堅	〃	黄褐色	脚部残存、煤状付着
5	蓋			2.8	つまみ部凹あり	外塗彩	鉄分粒	堅	〃	黒褐色	つまみ残存
6	大形壺			7.3	底部上げ底 下腹部、外反、稜あり	薄手、下腹部塗彩なし	鉄分粒	脆	灰褐色	灰褐色	下腹部残存
7	凹石							堅			
8	有柄石鏃										

番号	器	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
9	打製石斧										
10	鉄器										

土師

11	甕				胴部円形	外ロクロ整形、後刷毛目整形、内ヘラ整形	小砂	脆	赤褐色 灰褐色	茶褐色	上半部残存
12	甕				胴部円形	外ロクロ整形、後刷毛目整形、内ヘラ整形	小砂	脆	赤褐色 灰褐色	茶褐色	上半部残存
13	高坏				脚部細長し	外ヘラ磨き、縦脚内部刷毛目	鉄分粒砂	堅	黄褐色	黄褐色	脚部残存

参考

1	壺		17.9		頸部短かく、くの字に外反	刷毛目整形	鉄分粒	堅	黄褐色	黄褐色	
2	高坏	23.3	22.7	13.5	脚部に窓なし	赤彩厚く塗彩	鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	脚内 黄褐色	丸山橋東出土
3	台付甕				台付部発達	口縁部まで 櫛描施文		堅	黒褐色	黒褐色	望月晃氏宅地出土

第5表　E地区集石墓状土壙出土土器（29・30図）

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
1	甕	27.3	19.3	4.2	最大径胴部 やや胴部のびる	波状文、整文せず 口縁まで施文、ヘラ磨き	小砂石 鉄分粉	堅	赤褐色	赤褐色	2次焼成のあとあり
2	甕	29.5	19	7	胴部最大径	口縁から胴部まで施文、ヘラ磨き	小砂 鉄分粒	堅	黄褐色	黄褐色	底部煤状物付着
3	甕		18		最大径、胴部	波状文やや粗に櫛描 口縁まで施文、内ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	黒褐色	黒褐色	胴上半部残存
4	甕		23		胴部最大径	波状文整合せずメガネ状を呈す ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	黄褐色	黄褐色	上半部完存
5	甕		13.2		胴部最大径	波状文口縁まで施文 口縁薄手、ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	黒褐色	上半部のみ残存
6	甕			6	底部厚手		鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	黒褐色	下半部残存
7	小形甕	10.3	10	5	口縁部径最大	波状文口縁まで施文 ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	黒褐色 赤褐色	黄褐色	内部煤状物付着
8	小形甕		8.8		胴部最大径	口縁部まで細かな波状文施文、ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	黒褐色	火熱をうけ、下半部・外部剥落、台は？
9	小形鉢	6.2	12	4	胴部碗形	内外面に厚く赤彩 底部にヘラ切痕、ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	赤色	赤色	ほぼ定形
10	鉢	約12.5	約18.5	7.2	底薄手	ヘラ磨き無文	鉄分粒 小砂	脆	黄褐色	黄褐色	内部煤付着
11	鉢			7.1	底薄手	ヘラ磨き無文	鉄分粒 小砂粒多	脆	赤褐色	黄褐色	内部煤付着 縦痕あり
12	鉢？			8.8	揚底状	ヘラ磨き無文	鉄分粒小 小砂	堅	赤褐色	黄褐色 黒褐色	下半部残存
13	甕？			6.3			鉄分粒 小砂	堅	黄褐色		底部残存
14	甑	9.5	21.8	4.5	直線的に外反	無文ヘラ磨き	鉄分粒 小砂	堅	黄褐色	黄褐色	
15	甑			4.8		ヘラ磨き粗製	鉄分粒 砂粒	脆	黄褐色 黒色	黄褐色	底部残存
16	高坏			11	底部つよく外反 三角窓4ヵ所	脚内部ヘラ削りあと 外赤彩	砂粒多	堅	赤色	黄褐色	底部残存、剥落部分あり

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
17	高坏				碗形の坏部	脚部内部刷毛目	小砂	堅	赤色	塗彩なし	接合部の残存
18	〃				坏部底平面あり	接合ホゾあり 赤彩厚し	砂粒多	脆	赤色	脚内部 塗彩なし	〃
19	〃		17.2		坏口縁水平近く外反 稜あり	赤彩厚し	鉄分粒	堅	赤色	赤色	坏部分
20	〃		17.2		坏口縁外反し S字状	赤褐色の塗彩	胎土中は 灰黒色	堅	赤褐色	赤褐色	〃
21	〃		22.8		坏部稜なく外反	赤彩	小砂	堅	赤褐色	赤褐色	〃
22	壺	64	30.3	16	口縁外反ゆるく細口 下腹部に稜あり	下腹部内部刷毛目状 工具、ヘラ磨き櫛描 文細がき	鉄分粒が 目だつ	堅	上赤褐色 下黄褐色	上赤褐色 下黄褐色	下半部に火熱のあとあり
23	〃		30.1		口縁つよく外反	口縁破状文頸部 縦横平行文	鉄分粒	堅	赤褐色 塗彩	赤褐色	胴部の上残存
24	〃			14.4	下腹部に稜	内部刷毛目縦横走る	鉄分粒が 目だつ	堅	黄褐色	黄褐色	下半部残存

第6表　E地区弥生住居址出土土器（第31図）

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
1	壺		17.9		口縁部外反中位	ヘラ磨き 内面　横なで 外面　縦なで	鉄分粒 砂少	堅	黄褐色	黄褐色	頸部破片
2	壺？			7	底部突出形	ヘラ磨き 外面、内面まで赤彩	鉄分粒 石英粒	堅	赤褐色	赤褐色 黒褐色	下腹部残存
3	壺			10.2	下腹部外反つよし		鉄分粒	脆	赤褐色	赤褐色	〃　、器面剥離
4	壺？			11	上げ底	ヘラ磨き	鉄分粒	堅	黄褐色	黄褐色	底部残存
5	甕		17.2		最大径胴部 折返し口縁	細い櫛描文 頸部簾状文	鉄分粒	脆	灰褐色	黒褐色	火熱をうける
6	〃			6.4			鉄分粒 小砂	脆	灰褐色	黒褐色	底部残存、火熱
7	〃			8		外面　縦ヘラ磨き	砂粒多	堅	灰褐色	黒褐色	〃
8	〃			6	底薄し	ヘラ磨き	鉄分粒	堅	黒褐色	黄褐色	〃
9	〃			6.1		ヘラ磨き、	鉄分粒	堅	赤褐色	灰褐色	〃
10	高坏？				脚部折損後使用痕	ヘラ磨き、塗彩	鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	赤褐色	接合部残存
11	高坏				脚部開き穿孔あり	塗彩脚内部にもあり	小砂	堅	赤褐色	赤褐色	〃
12	小形壺		8.8		口縁部やや直立	内面　刷毛整形	小砂	堅	黄褐色	黄褐色	頸部上残存

第7表　E地区土師住居址出土土器（第32図）

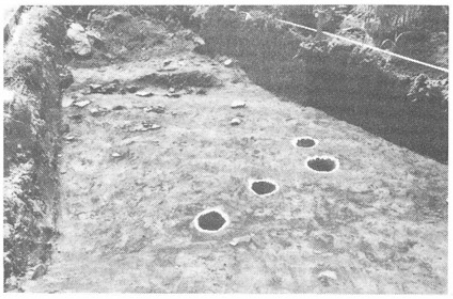
番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器高	口径	底径					外	内	
1	甕		22.7		口縁部くの字形に外反	外面　ロクロ整形 内面　刷毛目整形	小砂	脆	黒褐色	赤褐色	
2	〃		23.9		口縁部僅かの外反 円不整形	外面　ロクロ整形刷毛目 内面　ロクロ整形刷毛目					
3	坏	2.6	8.7	5	小形坏台部作り出し	糸切底、ロクロ整形	鉄分粒	堅	赤褐色	赤褐色	
4	坏	2.6	8.6	4.7	小形坏台部作り出し 稜あり	ロクロ整形、糸切底	鉄分粒	脆	赤褐色	赤褐色	

番号	器形	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		備考
		器面	口径	底径					外	内	
5	坏	2.7	10.6	5.2	内部中心乳状に盛り上る	ロクロ整形、糸切底	鉄分粒 小砂	堅	黄褐色	灰褐色	
6	〃	3.3	10.2	6.1	やや碗状、内部中心もり上る	ロクロ整形、糸切底	小砂	堅	灰褐色	赤褐色	
7	〃	5	12.3	5	外面　鉢巻状整形	内面　黒うすし、糸切底	小砂	堅	灰褐色	黒褐色	
8	〃	4.5	12	6.5	底部台作り出し形　不整形	ロクロ整形、糸切底内黒	小砂	堅	赤褐色	黒色	
9	〃	4.7	13.1	6	底部中心部盛り上り	薄手、糸切底	鉄分粒 細砂	脆	灰褐色	灰褐色	
10	〃	3.7	13.5	6.4	坏内中心盛り上り	薄手、糸切底	鉄分粒 小砂	脆	灰褐色	灰褐色	
11	〃	5.9	14.1	5.3	鉢巻状整形	内黒、糸切底		堅	灰褐色	黒色	破片離れて発見
12	〃	4.2	12.2	5	外面　鉢巻状整形	外面　ロクロ整形、糸切 内面　磨き	鉄分粒 小砂	堅	赤褐色	黒褐色	内煤状付着
13	高台坏付	5.8	14.2	7.6	円不整形	薄手、高台部後付着	鉄分粒 小砂	脆	赤褐色	黄褐色	
14	高台坏付	5.7	14.4	7.5	高台部厚手 円不整	高台部後付着 ロクロ整形	鉄分粒 小砂	堅	灰褐色	灰褐色	
15	高台坏付		14		口縁部僅か外反	ロクロ整形薄手	小砂	脆	橙褐色	灰黒色	高台部欠失
16	高台付碗		16		大形	高台部僅か？ ロクロ整形	小砂	脆	橙褐色	灰黒色	
17	高台付碗	6	15.5	6.1	低い高台、鉢巻状整形	ロクロ整形、内黒内磨き	小砂	堅	灰黒色	黒色	
18	高台付碗	7.9	15.7	7.6	大形	内黒、内面放射状に暗文、木目状痕あり	小砂	堅	灰黒色	黒色	外下部タール状付着
19	足高高台付坏	7	14.6	10 4	器台状の高台盤状の坏部	高台部付着後ヘラ切り、ロクロ整形	小砂	堅	黄褐色	黄褐色	
20	壺				小形壺	内部輪積手法	小砂	堅	赤褐色	赤褐色	胴部上残存
21	敲打石										
22	砥石										

1．調査団結団式

2．調査風景

3．調査風景

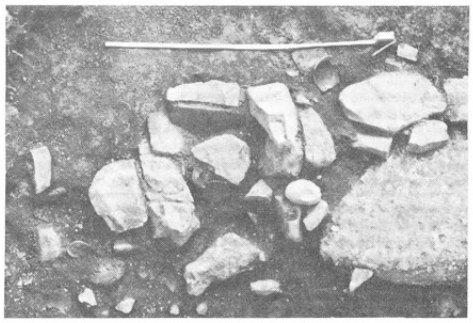


4．C地区弥生住居址

5．D地区集石址

7．E地区土師住居址

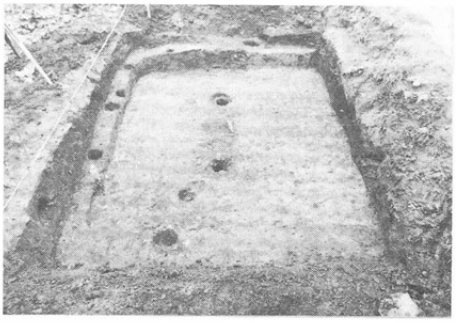
6．D地区弥生住居址



8．E地区住居址カマド址

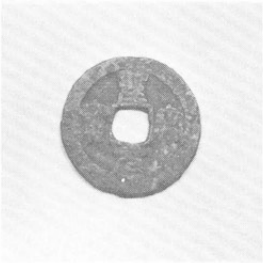
第二図版

1．E地区集石墓状土壙確認時

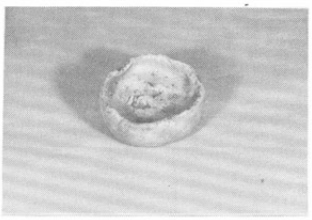


3．E地区弥生住居址

2．E地区集石墓状土壙



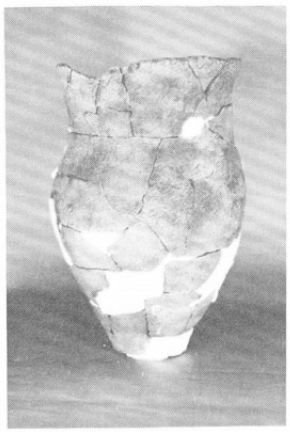
4．A地区出土古銭



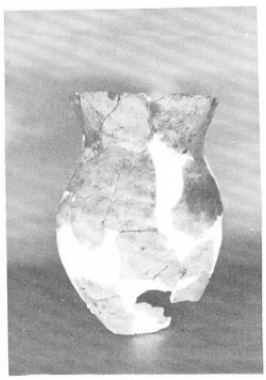
5．C地区住居址内出土
手づくね土器

6．C－23・24出土土器

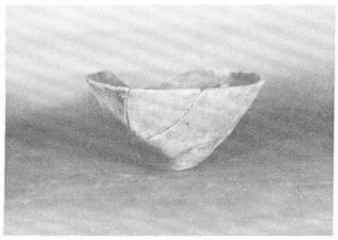
7．C地区住居址内出土刀子



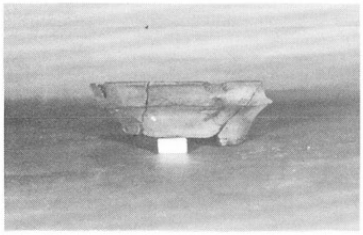
8．E地区集石墓状土壙
出土甕形土器



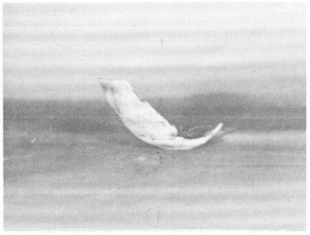
9．E地区集石墓状土壙
出土甕形土器



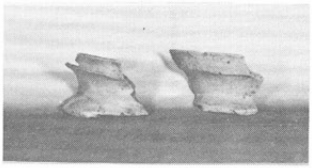
10．E地区集石墓状土壙出土
鉢形土器



1．D地区集石址出土壺形土器



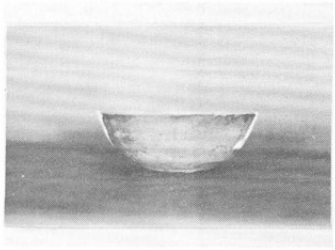
2．D地区集石址出土坩形土器



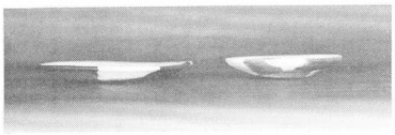
3．D地区集石址出土壺形土器

4．E地区集石墓状土壙出土
小形甕形土器

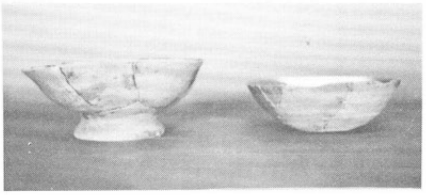
5．D地区集石址出土
手づくね器台形土器



6．E地区土師住居址出土



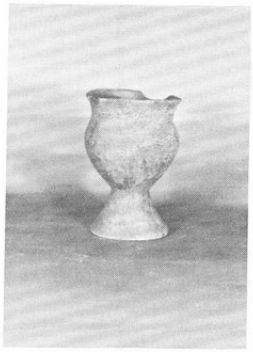
7．C－23・24出土皿形土器



8．E地区土師住居址出土土器

9．調査地周辺出土土製紡錘車

10．調査地周辺出土
高坏形土器



11．調査地周辺出土
高台付甕形土器

間　山

間山遺跡緊急発掘調査報告書

1984年3月30日

発行　中野市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社